

Title	『履軒古風』 卷一翻刻・訳注（附卷二校勘記）
Author(s)	湯城, 吉信
Citation	懐徳堂研究. 2010, 1, p. 35-100
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/24631">https://hdl.handle.net/11094/24631</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 『履軒古風』 卷一翻刻・訳注 (附卷二校勘記)

湯 城 吉 信

現実の国では、いかに美しい幸福、快適な生活に恵まれても我々は常に重力の影響下に動いているにすぎず、たえずこの影響にうちかたなければならぬ。だが思想の国では、我々は物体ならざる精神であり、重力という必然の重みから免れる。そのため地上のいかなる幸福も、美しい豊かな精神が時をえて自らの中に見いだす幸福には比すべくもない。

— ショウペンハウエル「思索」(『読書』について 他二篇)、『

岩波書店、一九八三、二〇頁)

『履軒古風』は中井履軒著の漢詩集である。全四巻。履軒は近体詩の規則を好まず、三十代以降、専ら古体詩を作った。『履軒古風』では製作年代順に作品が収録される。作品から確認できるおおまかな年代は以下のようである。

巻一 〓 明和三年(一七六六)【京都行まで】

巻二 明和三年(一七六六) 〓 明和四年

【京都行前後の詩】

巻三 帰坂後 〓 安永二年(一七七三)

巻四 年が確認できる詩：

甲辰(一七八四)、辛亥(一七九二)

この中、巻一と巻二とは、履軒の思いを表出した詩が多い点注目される(巻三、巻四は画賛が多い)。その他、老荘を題材にした詩は思想史上、(おそらく)キンケイを詠った詩は博物学史上、注目に値する。巻二は『洛汭奚囊』として別にまとめられており、筆者はすでに『洛汭奚囊』— 中井履軒の京都行(『懷徳堂センター報』二〇〇四)として、その全文と訳注とを紹介した。本稿で

は、巻一の全文とその訳注とを紹介したい。巻一からは、京都に旅立つまでの履軒の思いを窺うことができる。

テキストは、懷徳堂文庫には、履軒手稿本の他、「懷93」のラベルのある写本が一冊あり、新田文庫にも二冊の写本が、北山文庫にも吉田鋭雄写だと思われる写本が一冊ある。新田文庫の一冊（E138）は巻二以降だけを取めるが、履軒の添削が見える手稿で、詩作の過程を窺うことができるので貴重である。もう一冊（E147）は巻四にも句点があるので読解の参考になる（手稿本では巻四は「会虞―観天地第一」以外は句点がない）。北山文庫にある北山写本は、文字は見やすいが誤字もあるので注意が必要である。

本稿では、手稿本を底本とし、適宜各テキスト参照した。翻字は、現代通用字に改めた。

先に述べたように、筆者は、巻二の内容をすでに『洛納奚囊』―中井履軒の京都行』（『懷徳堂センター報』二〇〇四）で紹介した。ただ、その後、手稿本『履軒古風』に先立つ履軒草稿だと思われる新田文庫本（E138）を発見した。『洛納奚囊』と手稿本『履軒古風』巻二とでは若干出入があるが、新田文庫本『履軒古風』（E138）にはそれらすべての詩が見える。また、漢字を見せ消ちにして書き換えた箇所があり、推敲の跡を確認することが

できる。以上のことから、各テキストの前後関係は以下のようなであると推測できる。

新田文庫本『履軒古風』（E138）（巻二の部分）

↓『洛納奚囊』↓手稿本『履軒古風』巻二

そこで、本稿では、新田文庫本『履軒古風』（E138）（巻二の部分）中の『洛納奚囊』との異同を紹介したい。なお、その作業の中で、拙稿『洛納奚囊』―中井履軒の京都行』における翻刻ミスを発見した。お詫びを申し上げます、合わせて挙げたい。

## 『履軒古風』

印「履軒圖書」、「懷徳堂圖書記」、「天生寄進」、「大阪大學圖書之印」、受入印「昭和39.12.22受入/104997」

## 序

履軒幽人喜誦古風詩賦、時而出之者、此篇是也。有類乎兩漢之詞、有類乎唐人長短篇、若兩漢巨賦、非其所好也。又有倣乎三百篇\*、有倣于楚之騷\*。幽人不喜魏晉六朝

之詩、尤不許陳思<sup>\*</sup>之八斗<sup>\*</sup>矣。然酷愛彭沢<sup>\*</sup>之辭、而不能學也。擬而弗類焉者、亦或有之。及銘贊辭皆附焉、合而命之、曰履軒古風。其用韻獨循古韻、断々乎弗奉休文<sup>\*</sup>正朔也。蓋汚之、其好古之癖不可医也。若斯、宜乎今人之弗吾聽。

履軒幽人自序「既雨既處<sup>\*</sup>」「尚德積載<sup>\*</sup>」(印)

【注】○三百篇：『詩經』のこと。○楚之騷：楚の国の『離騷』。広く楚辞のことを言うと思われる。○陳思：曹植のこと。○八斗：謝靈運が曹植の才能を称えて、「天下才共一石、曹子建独得八斗、我得一斗」(天下の才一石を共にし、曹子建独り八斗を得、我一斗を得)(『南史』謝靈運伝)と言ったことに基づく。○彭沢：陶淵明のこと。○休文：梁の沈約の字。沈約は、『四声譜』を著した音韻学の權威。○奉：正朔：「正朔を奉じる」で臣下になること。○「既雨既處」「尚德積載」(印)：『周易』小畜の卦(上九)の「既雨既処、尚德載」に基づく。履軒は、この文句を「既に雨ふりて既に処<sup>ゝ</sup>り、徳の載<sup>ゝ</sup>むを尚ぶ」と読み、「不遇な状況においても心安らかに居り、(表立った行動は取らずに)徳を積むことだけを尊ぶ」と解していたらしい。履軒の『周易雕題』には以下のようにある。「『処』、安居也。時可則出行、不可則不出。『既

雨』、不可行之時也。故安居不出、便是德積而未見於行事之時也。…往必遇害。君子唯脩德於身、靜以処之而已。君子在乱世棄富貴、独積德於身者当此。…」。履軒の自己認識、生き方の覚悟を見ることができよう。

【書き下し文】

履軒幽人喜びて古風詩賦を誦し、時にして出だす者、此の篇是れなり。両漢の詞に類する有り、唐人の長短篇に類する有れども、両漢の巨賦の若きは、其の好む所に非ざるなり。又た三百篇に倣<sup>なま</sup>う有り、楚の騷に倣<sup>なま</sup>う有り。幽人魏晋六朝の詩を喜ばず、尤も陳思の八斗を許さず。然くして彭沢の辞を酷愛するも、学ぶ能わざるなり。擬して焉<sup>これ</sup>に類せざる者、亦た或いは之有り。銘贊辞に及ぶまで皆な焉<sup>こゝ</sup>に附し、合して之に命づけて、『履軒古風』と曰う。其の用韻は独り古韻に循<sup>したが</sup>い、断々乎として休文の正朔を奉ぜざるなり。蓋し之を汚さんとも、其の好古の癖医<sup>な</sup>すべからざるなり。斯<sup>か</sup>く之の若くんば、宜<sup>よ</sup>なるかな、今人の吾れを聽しとせざるは。

【訳】

履軒幽人は、古風な詩賦を詠み、折に触れて作つたものがこの篇である。「その中には」両漢の詞に類するも

のもあれば、唐人の長短篇に類するものもあるが、両漢の長編の賦のようなものは、その好むところではない。また『詩経』を模倣するものもあり、楚辞を模倣するものもある。幽人は魏晋六朝の詩を喜ばず、特に曹植の八斗の天才は認めない。そして陶淵明の辞を酷愛するが、学ぶことはできない。真似しようとして真似できなかつたものもまたある。銘賛辞に及ぶまでみなここに附して、合わせてこれを名づけて『履軒古風』と言う。その用韻は専ら古韻に従い、断固として沈約には従わない。おそらくどのようなにしても、その好古の癖は治すことはできないであろう。以上のようなので、今の人が私を良しとしないのは、もつともなことだ。

【参考】

履軒は、古韻を研究し、明和六年（一七六九）に『諸韻瑚璉』を、明和七年（一七七〇）に『履軒古韻』を著している。

卷一

\*三十五歳に京都に行くまでの作品を収める。自らの生き方の模

索が見える。

礼賦

\*『荀子』の礼賦に異議を唱え、礼のすばらしさを織物に喩えて歌い上げた賦。

荀卿氏六賦、礼其一也\*。其致意也遠、其厝辞也高。然要其歸、依然性悪善偽之説已\*。余偶読焉、憮然久之、遂有是述、其辞曰、

荀卿氏が六賦、礼は其の一なり。其の致意や遠く、其の厝辞せじや高し。然れども其の歸を要するに、依然として性悪善偽の説のみ。余われ偶たままた焉これを讀み、憮然たること之を久しくし、遂に是の述有り、其の辞に曰く、

崑崙之丘

靈蚕吐糸

法天兮為經

則地兮為緯

展之駕之

造化之機

載登載織

漢上之女子\*

其質太素

崑崙の丘

靈蚕糸を吐き

天に法りて經と為し

地に則りて緯と為し

之を展べ之を駕る。

造化の機

載ち登し載ち織り

漢上の女子

其の質太素

上帝之衣

玄黄<sup>\*</sup>絢之

維有陶唐氏<sup>\*</sup>

嬀也繼之

九文五采

姑伝婦承

至于鎬之姫<sup>\*</sup>

織染之工

於斯大備

其縷三千

其綜三百

煌々濟々

其文有郁

大君作被兮

煦万方赤子

姫氏老而婦不良

機朽蠹兮靈蚕死

被百結兮四出

赤子喁々兮莫之慰

彼卉之絮兮

亦可以為被

上帝の衣

玄黄もて之を絢る。

維に陶唐氏有り

嬀や之を継ぎ

九文五采

姑伝え婦承く

鎬の姫に至り

織染の工

斯に於いて大いに備わる

其の縷三千

其の綜三百

煌々濟々として

其の文郁有り

大君被を作り

万方の赤子を煦む。

姫氏老いて婦良からず

機朽蠹し靈蚕死す。

被百結して四出し

赤子喁々として之を慰む莫く

彼の卉の絮や

亦た以て被と為すべく

誰其為之

陶唐之裔兮

有漢之季

其采伊何

維紅暨紫<sup>\*</sup>

豈謂不懿

不如靈被也

洵煥且美

自茲厥後

是統是似<sup>\*</sup>

有弊有革

于今千祀

嗟乎靈蚕兮

終世不可觀

撫彼百結之餘

其何所徂

薄言楮之

以待後之作者

誰か其れ之を為めん

陶唐の裔

有漢の季

其の采伊れ何ぞや

維だ紅の紫に暨ぶも

豈に靈被に懿からず

如かずと謂わん

洵に煥として且つ美し

茲厥より後

是れ統ぎ是れ似ぎ

弊有り革有り

今において千祀

嗟乎靈蚕や

終世観るべからず。

彼の百結の餘を撫いて

其れ何くにか徂く所ぞ

薄か言に楮し?

以て後の作者を待つ。

【校勘】○而…「兮」を上から直す。○之、以…「之、兮」を上から直す。

**【注】**○荀卿氏六賦、礼其一：『荀子』に「賦篇」があり、冒頭は礼の賦である。○依然性悪善偽之説已：礼の賦に「性不得則若禽獸、性得之則甚雅似者歟」とあることを言うのである。○漢上之女子：『詩經』周南、「漢広」に「漢上游女、無求思者」とあるのを参考にするか。○玄黄：『孟子』滕文公下篇に、王への礼物の布として登場する。○陶唐氏：太古の伝説上の帝王、堯のこと。儒教で理想の君主とされる。○媯：堯と並び称される太古の伝説上の帝王、舜の姓。○鎬之姫：周王の姓は姫。鎬は、周の都の所在地。周代の文王、武王も理想の君主とされる。○百結：つぎはぎの服。『藝文類聚』卷六七所引王隱『晋書』「董威輦每得殘碎繒、輒結以為衣、号曰百結」など。○紅暨紫：『論語』陽貨篇に「惡紫之奪朱也（紫の朱を奪うを惡む）」という孔子の言葉が見える。古来、中国では朱が正式な色とされた。○是綫是似：「似」も継ぐの意。『詩經』「良耜」に見える。

**【訳】**荀子の六つの賦の中、礼の賦はその一つである。その内容は深く、その表現は高邁である。だが、その帰着するところは、やはり性悪説にすぎない。私はたまたまこれを読んで、しばらく惘然としてしまい、やがてこの文章をしたためることになった。その言葉に言う。

崑崙の丘で靈妙なる蚕が糸を吐き、天に則って縦糸とし、地に則って横糸とし、これを操った。造化の織機にのぼしては織り上げていき、漢水のほとりの神女は汚れなき性質を持ち、上帝の衣は「天地の色である」黒と黄とで飾られた。ここに、堯が登場し、舜がそれを継ぎ、すばらしき文が織りなされ、それを姑が伝え、婦人が承けた。姫氏（周王朝）に至って、織物の技術はたいそう完成した。その布は種類も多く、煌々と美しき模様があり、大君は布団を作って、世界中の赤子を育んだ。姫氏（周王朝）が衰えて、婦人は良くなく、織機は朽ち、靈妙なる蚕も死んだ。布団はつぎはぎの物が様々出現し、赤子はギャーギャーと「泣き」慰められず、木綿で布団も作れるが、乱れた布団は、誰がよくそれをおさめよう。堯の末裔、漢末には、この綫ほどのようになったであろう。紅が紫に混じった（正式な色が失われた）が、靈妙なる布団に比べてあなたがち悪いわけでもない。まことに暖かくかつ美しい。その後、継承されたり壊されたり革められたりしつつ、今に至るまで千年、ああ、靈妙なる蚕は、ついぞ見ることはできなかった。あのつぎはぎの遺物を拾って、さてどのようにすればよいのか。とりあえず、ここに記して後世の作者を待ちたい。

将棋引

\*将棋の対局を活写する。引は楽府体の詩。

方地瓜分垠封疆

方地瓜分し封疆を垠なみり

中天星墜殺氣揚

中天星墜ち殺氣揚がる。

閩外秋令元有寄

閩外の秋令元寄やどり有り

桂殿春芳擁玉皇

桂殿の春芳玉皇を擁す。

六師死命仰鉞旄

六師死命鉞旄えいぼうを仰ぎ

千里成筭下廟廊

千里成筭廟廊を下る。

歩卒九道先啓行

歩卒九道先に行を啓きき

令嚴部伍森成行

令嚴たる部伍森しんとして行を成す。

前徒知進不知退

前徒進むを知りて退くを知らず

五伐七伐声鏘々

五伐七伐声鏘せうせう々たり。

威名元伝漢飛将

威名元漢飛将と伝え

意气縦横不可当

意气縦横たりて当たるべからず。

軽車衝墉多轆軻

軽車墉かに衝たりて轆軻多く

驕馬遭步或玄黄

驕馬歩に遭あひ玄黄に或まう。

更把生虜補卒乘

更に生虜を把とりて卒乗を補まい

遂鼓死士奪塹陞

遂に死士を鼓たして塹陞を奪う。

従軍有賞皆金印

従軍賞有り皆金印

幕府策勳拜龍章

幕府勳を策さして龍章を拜ます。

金将本来数奇者

金将本来数奇なる者にして

血戦功就独相忘

血戦功就なり独り相忘わる

不見夫差心益驕

見みずや夫差の心益々驕ありて

豈料勾踐胆日嘗

豈に料らんや勾踐胆を日々嘗あむるを。

虎賁积嚴寇伺釁

虎賁こへん嚴を積とき寇すきを伺うい

将军在外邦無良

將軍外に在りて邦に良無し。

疾雷一声不掩耳

疾雷一声耳を掩おわす

車馬衝虚忽翱翔

車馬虚を衝つかれ忽たちち翱翔ちゆうしようす。

金銀棄擲徒資敵

金銀棄擲し徒らに敵を資なけ

四面重围災剥床

四面重围され災はい床を剥はぐ。

禁垣車馬接踵没

禁垣の車馬踵かを接つけて没し

勤王旌旗引領望

勤王の旌旗きんぎ引領くひを引ひきて望まる。

且躋且長遡洄道

且かつつ躋のぼり且かつつ長ながく遡かき洄道わいどうを遡かり

不遂不退触藩羊

不なすままず退ひかず藩まがきに触ふる羊。

白虹竟天謫何在

白虹天に竟わたり謫つみ何いずにか在らん

非王是将非将王

王に非あらず是れ將しやうにあり將王しやうおうに非あらず。?

股肱移禍雖已矣

股肱こたてに禍わざを移うつすこと已おわれりと雖も

天殃寧知弗可攘

天殃てんやう寧なんぞ攘はらうべからざるを知らん。

左将孤軍天一角

左將孤軍天一角

斜指斜突氣激昂

斜かために指さし斜かために突つき氣激昂きげきやうす。

一木胡能支崩厦

一木ひとこ胡なんぞ能よく崩厦くわいを支たえん

櫺壁便見哭道傍

櫺壁れんぺき便たち見みる道傍みちのへに哭なするを。



鬪蝸自古夢一覺 鬪蝸 古より夢一たび覚むれば  
留与閑人鑿興亡 留めて閑人と興亡を鑿む。

寄語多少青衿子 寄語す 多少の青衿子よ

莫動機心徒自荒 機心を動かして徒らに自ら荒むこと

莫かれ、と。

詩中所序碁勢、往々凡庸敗局、非高手須有、所謂簾下店頭手  
段\*。亦只為吾輩人言、非為高手謀也。

詩中序の碁勢、往々にして凡庸敗局、高手須く有るべきに非ざるなり。所謂簾下店頭手段なり。亦た只だ吾輩の人の為に言うのみに、高手の為に謀るに非ざるなり。

【校勘】○何：「安」の上に「何」と書く。

【注】○闕外：域外の意。転じて出征軍。○漢飛：將漢の李広が匈奴からこう呼ばれた。○玄黄：この場合、馬の病。黒毛の馬が黄色になるからと言う。○翱翔：さまようこと。○触藩羊：『周易』大壯の卦(上六)に「羝羊触藩、不能退、不能遂、无攸利」(羝羊 藩に触れ、退く能わず、遂む能わず、利する攸無し)とある。行き場を失うこと。○白虹：兵の象。「白虹貫日(太陽を貫く)」で君に危害を加える象。『史記』などに見える。○股肱移禍：『史記』楚世家に、昭王が病気になった際、その

禍を將相に移すことができるといふ太史の言に対して、昭王が「將相、孤之股肱也。今移禍、庸去是身乎」(彼らは私の体の一部だ。彼らに禍を移しても我が身から禍が去ったことにはならない)と言ったことに基づく。○簾下店頭手段：縁台将棋のへぼ将棋という意味であろう。

【訳】升目に国境を分かち、中空を星が落ち殺気がただよう。都城の外では軍隊が舍りに落ち着き、宮殿では春の草が皇帝を取り囲んでいた(最初の整った駒の配置を言う)。天子の軍隊は命を受け武器や旗飾りを取り、千里に作戦を巡らし朝廷を辞した。歩卒(歩)は全国の道路(九つの目)に先鋒となり、厳格たる部隊は並び行進する。前方の卒(歩)はひたすら前進し後退することを知らず、声を上げながらひたすらに斬りかかる。威名はもと漢の飛將軍と賞され、意気盛んに防ぐことができな。軽い車(香車)は、城壁にぶつかると行きなずみ、驕れる馬(桂馬)は歩卒に遭うと窮地に陥る(桂の高飛び歩の餌食)を言うのである。捕虜を生け捕りにして我が兵力を補い、遂に志士を鼓舞して敵の陣地を奪う。従軍に賞あるのはすべて金印で(金に成ること)、幕府で功名を称揚するのに龍の文様を拝む(龍に成ること)。金將は元来不幸者で、血戦で功名を遂げれば忘れられてしま

う。ご覧あれ、夫差の心はますます驕り高ぶり、勾踐が胆を嘗めて復讐を誓っているのを知るよしもない。精銳軍も嚴重な守りを緩め、敵が隙を窺う。將軍は出払い、国に優れた部下もなく、急襲されて防ぐ暇もない。車馬は虚を突かれ逃げまどう。金や銀を捨ててひたすら敵を助け（敵の駒になること）、四面を包囲され、災禍は寢室にまで迫る。宮廷の車馬は次々となくなり、勤王の旗印を首を長くして待つ。くねくねと長い道を逃げ回り、前進も後退もできず、行き止まりにぶち当たる。白い虹が天をわたり、罪は誰にあるかと議論し、王か將軍かと取り沙汰す。？〔昭王と違つて〕股肱の臣下にも禍を移したが、天罰はどうにも払いのけることができない。左の將軍（角のこと）は天の一角で孤軍奮闘し、斜めに指し斜めに突撃し、意気盛んだ。〔だが〕一本の木では崩れゆく建物を支えることはできない。棺を道端に泣き叫ぶのを見、蝸牛角上で争つた蝸牛が夢から覚めれば、〔盤をそのまま〕留めて暇人が攻防を云々する。若者諸君よ、巧詐の心を勞して自らを損なうことのないように。

詩の中で描写したのは、凡庸な負け将棋で、上手な人の手ではない。いわゆる縁台将棋のへぼ将棋というやつである。また私のような輩のために言つただけで、上手な

人のために言つたものではない。

### 秋夜独坐

\*秋の夜に時間の過ぎゆくのを嘆く詩。

独有流年感

独り流年の感有り

挑燈坐三更

燈を挑<sup>か</sup>げて三更に坐す。

疎簾挂落月

疎簾に斜月挂かり

寒蛩悲中庭

寒蛩<sup>きよう</sup>中庭に悲しむ。

木葉知落尽

木葉落ち尽くすを知れるは

此夕減秋声

此の夕べ秋声減じればなり。

【校勘】○落：「斜」の上に「落」と書いている。

【訳】独り月日の過ぎ去るのを感じ、灯りをかいて真夜中に座る。疎らかな簾に傾いた月が懸かり、晩秋のコオロギは中庭で悲しんでいる。木の葉はすっかり散つたらしい、今晚は木の葉の音が聞こえにくくなつたから。

### 樵者

\*樵が自然にとけ込んで、無心の境地に達しているがごとき状況を詠う詩。竹山『奠陰集（詩集）』卷一（影印本二六六頁）に「樵

者」と題する詩が、卷二（影印本二八〇頁）に、「雪中樵夫」（『和歌新題百首詩』）と題する詩がある。いずれも題詠であろう。

与木石居鹿豕遊 木石と居り 鹿を豕#いて遊ぶ  
不知孰是忘機者 知らず 孰たれか是れ機を忘るる者なるかを  
無端斧斤動雲根 端はじ無く 斧斤を雲根に動かせば  
一雨滿山霜葉下 滿山に一雨ふり 霜葉下る

【注】○忘機…機心（巧詐の心）を忘れる。○雲根…山の高所を言う。

【訳】木や石という、鹿を追って遊ぶ。  
（この中）誰が巧詐の心を忘れる者なのであろうか。  
無心に斧を雲の根に振るうと、滿山に一雨降り、紅葉が落ちる。

寓燭閨情（燭に閨情を寓す）

\*閨情は閨（ねや）での情。

空房復何有 空房復た何か有らん  
孤燭思難裁 孤燭思い裁ち難し。  
滴尽千行淚 千行の涙を滴したり尽くし

丹心亦作灰 丹心亦た灰と作る。

【訳】人氣のない部屋には他に何も無い。一本の灯りの思いはたち（「芯を」裁つ（かく）」に（「未練を」断つ）」を掛ける）がたい。千筋もの涙を流し尽くし（「蠟が流れる」ことと「涙を流す」ことを掛ける）、赤い心（「赤い芯」に「真心」を掛ける）はまた灰となる。

墨水咏、倣閩東体（墨水咏、閩東体に倣う）

\*墨水は隅田川の漢名。閩東体は未詳。

西岸下武陵 西岸 武陵を下り  
東岸上綵州 東岸 綵州に上る。  
岸々秋一色 岸々は 秋一色に  
凄風滿客舟 凄風 客舟に滿つ。

其二

王孫昔此遊 王孫 昔 此こゝに遊び  
芳草年々緑 芳草 年々 緑なり。  
于今白鳥飛 今において 白鳥飛び  
京客勞心曲\* 京客 心曲を勞す。

【注】○王孫昔此遊：『楚辭』「招隱士」の「王孫遊兮不歸、春草生兮萋萋」を意識するか。○京客勞心曲：心曲は、心のくま、心中。『伊勢物語』第九段「東下り」で、京から「隅田川」に来た男が都鳥（ユリカモメ）を見て郷愁に襲われるという有名な話に基づく。

【訳】西岸は江戸に下り、東岸は上総に上る。両岸は秋一色に寒風は客船に満ちる。

（その二）貴族の子弟は昔、ここで遊んだが、芳しい草は毎年緑色に茂っている。今は白鳥が飛び、京都の客は心を悩ませる。

班婕妤

\*班婕妤は、漢の武帝の寵愛を得た美人。後、寵愛を失い、自らを秋の扇に喩えて、「怨歌行」という歌を作った。

廟廊正色士 廟廊正色の士  
内宴召来不 内宴召し来たるやいなや。  
一自辞同輦\* 一たび自ら輦を同じくするを辞すれば  
棄扇不待秋 棄扇秋を待たず。

【注】○同輦：『蒙求』に、成帝が、後庭に遊んだ際、

同じ輦（車）に乗ろうと班婕妤を誘うと、「古の聖賢はそのようなことはしませんでした」と断った話がある（『班女辞輦』）。

【訳】朝廷のまじめな士（？）が宮廷での宴会に招くかどうか。

ひとたび同じ輿に乗ることを拒否したばかりに、扇は秋を待つまでもなく捨てられた。

怨詞

\*女性の怨みを詠った閨怨詩。題詠であろう。

妾如弓上絃 妾は弓上の絃の如く  
君如絃下弓 君は絃下の弓の如し。  
絃懸合繩墨 絃懸かりて繩墨に合うも  
弓体不可窮 弓体窮むべからず。

【訳】私は弓の上の弦のようで、あなたは弦の下の弓のようです。  
弦は規則に従いますが、曲がった弓の体はどうしようもありません。

老子

\*道家の祖として有名な老子を詠った詩。履軒は老荘について一家言を有していた（拙稿「中井履軒の老荘観」〔中国研究集刊〕四六号、大阪大学中国学会、二〇〇八年）参照。

退歩吾不做 退歩して吾れは做さず

說雌\*更禁人 雌を説きて更に人に禁ず。

恕視\*天下湖 天下の湖るるを恕視するも

百年營此身\* 百年此の身を営む。

【注】○雌：履軒は老子の道を「雌道」だと言った。雌

道とは、消極的で卑怯な方法を言う（拙稿「中井履軒の老荘観」〔中国研究集刊〕四六号、大阪大学中国学会、二〇〇八年）参照。○恕視：恕（カイ、カツ）は、憂える、心配のない様など相反する意味を持つが、ここでは「介」に通じ、気にする意にとらえた。○百年營此身：老子が長生きしたという言い伝えを踏んでの発言であろう。履軒は老子を養生術の祖と見ないが、一般的伝承に従ったのであろう。『史記』老子列伝「蓋老子百有六十餘歳。或言二百餘歳。以其修道而養寿也。」履軒『老子雕題』二八（五九治人事天章）「…与養生無干涉。…老聃元無仙術。謬為道家之祖、受誣太甚。」

【訳】退歩して自分は何もしないばかりか、消極的なやり方を説いて、人にあれこれするなどと言う。世の中の人々が耽溺していると文句を言いつつ、自分は養生に励んでいる。

【参考】

『篋陰集（詩集）』卷二（影印本二八一頁）に竹山作「老子」詩があり（蘭洲「和歌新題」に題を取った竹山「和歌新題百詩」）、「青牛蓬累日、何物候真人、関上奪朱氣、釀成胡羯塵」と詠う。

独興 在馬山作（馬山に在りての作）

\*馬山は有馬山。履軒の師五井蘭州は、宝暦九年（一七六〇）に中風の湯治に有馬に行った。その際、履軒も供した（西村天囚『懷徳堂考』上五一頁）。これはその際の作品であろう（蘭洲の作品は『蘭洲遺稿』に見える）。有馬へは懷徳堂関係者はたびたび訪れたらしく、履軒の弟子竹島實山も「馬山紀行」を残している。

行到樺樹下 行きて樺カクの樹の下に到り

掃石坐泉声 石を掃きて泉声に坐す。

無風葉自墜 風無くして葉自ら墜ち

時聴魚子鳴 時に魚子の鳴くを聴く。

【校勘】○樺：手稿本は「樺」を墨で消す。ラベル「懷93」の写本は「霜」に作る。○葉：墨で消す。

【注】○樺：履軒はサクラに樺の字を当てた（履軒著『画觸』に詳しい説明が見える）。

【訳】歩いていってサクラの木に到り、石を掃き清めてせせらぎの音を聴きながら座る。風がないのに葉は自然と落ち、時々、魚の子が鳴くのが聞こえる（?）。

### 蠹魚

\*自分を蠹魚（しぎょ）に擬えた詩。

此魚不躍淵

此の魚 淵に躍らず

老死在陳編

老死すること陳編に在り。

男兒七尺軀\*

男兒 七尺の軀からだ

偏与爾相憐

偏なんじえに爾と相い憐れむ。

【注】○七尺軀：陸雲詩に多く見える。

【訳】この魚（シミは漢字で書くと蠹魚）は淵で飛び跳ねず、古書の中で老いて死ぬ。七尺の身を持つ男兒であ

りながら、ひたすらお前と（同じ境遇を）憐れみ合う。

### 聚頭扇

\*扇子のこと。

破輪用陽数\*

破輪 陽数を用ゆ

三分三十輻\*

三十の輻を三分し

楮輞飛生風

楮輞 飛びて風を生じ

一駕解焔々\*

一駕 焔々たるを解く

【注】○陽数：奇数。（扇子の骨の数は奇数だった？）

○三十輻：車輪の矢の数は三十と決まっていた（『老子』十一章「三十輻共一轂」を参照）。○輞：大輪。車輪の回りのたが。○駕：乗り物。○焔々：盛んな様。

【訳】破れた車輪（\*扇子を喩える）は奇数を使う。三十の矢を三分し（\*扇子はおよそ百二十度なので、三百六十度の三分の一）、紙の車輪が飛んで風を起こし、一台の乗り物が炎暑を払う。

舟行雜詩 網干在龍野西南三里許

(網干は龍野西南三里許ばかりに在り)

\*龍野は中井家の出身地であり、履軒・竹山兄弟も何度も訪れている(履軒著「昔の旅」を参照されたい)。この詩は、懷徳堂文庫所蔵の「竹山・履軒諸先生張交(はりませ)」と題箋の張られた屏風に「舟行雜詠」として見え、題辭の下に「賦昔遊寄播中兄弟」とある(末尾に「履軒幽人」の署名と「完」「履軒幽人」の印あり)。若干の違いについては、【注】ならびに【参考】に示した。

山城平旦氣 山城 旦の氣

正与猿鶴\*似 正に猿鶴と似たり。

結伴出郭門 結伴して郭門を出れば

即便伊川沚 即ち便ち伊川の沚ほとり。

其二

行々長堤草 行き行く長堤の草

草短鞋底柔 草短くして鞋底に柔し。

行々且莫亟 行き行き且くは亟いとく莫なかれ

將喚下灘舟 將に下灘の舟を喚よばんとす。

其三

日出東岑上 日は東の岑みねの上に出

未消一川烟 未だ一川の烟消えず。

烟際頻回首 烟の際に頻りに首を回めぐらせども

棹声不見船 棹声(のみにして)船を見ず。

其四

烟破棹影来 烟は棹の影を破りて来たり

載薪霜未乾 薪を載せて霜未だ乾かず。

嗟来将一醉 嗟来、將に一醉せんとするに

載我到網干 我を載せて網干に到る。

其五

篙人顧我笑 篙人 我を顧みて笑い

轉棹舟成巴 棹を転じて舟 巴を成す。

低歌無答語 低く歌いて答語無く

艤舟在晴砂 舟を艤つくること晴砂に在り。

其六

同人一椀酒 同人 一椀の酒

探囊各準還 囊ぶくろを探り各々還まわすを準はかる。

買得長江水 長江の水を買い得て?

兩岸三里山 兩岸 三里の山。

其七

烟波一條路\*  
勢靄\*穿得開  
右山每牆面\*  
左山遠徘徊

烟波 一條の路  
勢靄 あひだ 穿ち開き得たり。  
右の山は つね 毎に牆 かべ に面し  
左の山は 遠く徘徊す。

其八

急流半篙水  
山々一樣春  
山鳥啼送舟  
山花笑迎人

急流 半篙の水  
山々 一樣に春なり。  
山鳥 啼きて舟を送り  
山花 笑いて人を迎う。

其九

舟繞山趾過  
山背舟行走  
山容看不足  
双眸每在後

舟は山趾を繞りて過ぎ  
山は舟行に背 そむ きて走 に ぐ。  
山容は看れども足りず  
双眸は つね 毎に後ろに在り。

其十

水浅鑑人面  
魚在菱花中  
投食莫猜鉤

水は浅くして人面を鑑 うかが し  
魚は菱花の中に在り。  
食を投ぐるも鉤 かぎ を猜 な げう莫かれ

機心我已空

機心 我れ已に空し。

其十一

時々過淺瀬  
憂々船有声  
船底薄如紙  
能擗砂石行

時々 淺瀬を過ぎ  
憂々 あつち と船 声有り。  
船底 薄きこと紙の如し  
能く砂石を擗ちて行く。

其十二

春水能送舟  
春風不劳帆  
咄嗟長干尽  
網干竹樹巖

春の水は能く舟を送り  
春の風は帆を勞せず。  
咄嗟に長干尽き  
網干 竹樹 巖たり。

【注】○猿鶴：戦死者の靈を言う。『太平御覽』卷八五皇王部、卷八八八妖異部四「變化下」、卷九一六羽族部「鶴」「抱朴子」曰、周穆王南征、一軍尺化、君子為猿為鶴、小人為虫為沙」とある。○探囊：ここでは「探籌」(くじを引くこと)と解した。○買得長江水、兩岸三里山：李白「早發白帝城」「朝辭白帝彩雲間、千里江陵一日還、兩岸猿声啼不住、輕舟已過萬重山」の「兩岸」「千里」を意識するものか。○路：「竹山・履軒諸先生張交(は



りませ)」では「道」に作る。○斃霽「竹山・履軒諸先生張交(はりませ)」では「歎乃」に作る。○牆面：『論語』陽貨篇に、見通しが利かないことを言う表現として見える。履軒は『論語雕題』で、「面、虚字、猶向也。牆面、面於牆也」と雕題を付けている(『小学雕題』でも同様)。

【訳】

(その一)

山城の夜明けの気配は、ちようと(死人が化したという)猿や鶴のようだ(\*注参照)。

伴とともに城門を出れば、すぐに掛保川のほとりになる。

(その二)

長い堤を歩いて行けば、草は短く草鞋の底に柔らかである。

まあ、慌てるなさるな、今、川下りの舟を呼びますから。

(その三)

日は東の峰の上に出、川一面の霧はまだ晴れない。

霧の際をしきりに見回してみるが、棹の音だけで舟は見えない。

(その四)

霧を破って棹の影が現れ、薪を載せて、霜はまだ乾いて

いない。

さあ、一酔いしようかと思いきや、私を乗せてもう網干に着いた。

(その五)

船頭は私を見て笑い、棹を回して船が旋回する。

低く歌って答えることもせず、舟を晴れた砂浜に着ける。

(その六)

同人が一椀の酒をくじ引きで飲む順番を決める。

長江下りを買った気分、両岸には三里の山が続く。?

(その七)

水面の一筋の路がたちこめた霧を開いて進む。

右の山は絶壁に面し(たように迫り)、左の山は遠くにある。

(その八)

急流は棹半分ぐらいの深さがあり、山は春の色でいっぱいである。

山鳥は鳴いて舟を送り、山花は笑って人を迎える。

(その九)

舟は山の麓を巡り、山は舟の後ろへと遠のいていく。

山の姿を見足りずに、瞳は常に後ろを振り返る。

(その十)

水は浅く人の顔を映し、魚は菱の花の中にいる。

餌を投げても釣り鉤を疑わなくてよいぞ、私には魚を釣ろうという魂胆などすでになくなってきているのだから。

（その十一）

何度も浅瀬を過ぎ、かつかつと船に音が響く。

船底は紙のように薄く、砂利を打ちながら進んでいく。

（その十二）

春の水はよく舟を進め、春の風は帆にやさしく吹く。

たちどころに長い岸が尽き、網干の竹林が厳かに現れる。

【参考】 懷徳堂文庫所蔵「竹山・履軒諸先生張交（はりませ）」と題箋の張られた屏風中の「舟行雜詠」では、『履軒古風』のその十が九番目に、その九が十一番目にあり、両首の間に『履軒古風』にはない以下の作品がある。

舟中有屈生\*

舟中に 屈生有りて

莫謾誇独醒

独り醒めたりと 謾誇すること 莫かれ

魚小不堪葬

魚 小さくして 葬るに 堪えず

水浅不没脛

水 浅くして 脛を 没せず

【注】 ○屈生：憂国の詩人として有名な屈原のこと。以下、【解説】を参照されたい。○謾：あなどる。

【訳】 舟の中で、屈原がいて、「世の中で」自分だけが醒めていると誇るな。

魚は小さくて「漁夫辞」にあるように、人を「葬る」ともできないし

水は浅くて脛にも達しない（「漁夫辞」にあるように、足を洗うこともできない）。

【解説】『楚辞』で屈原作と伝えられる「漁夫辞」を踏まえる。同詩では、放逐され、世の混濁を嘆く屈原に対し、漁夫が世に合わせて生きていくことを説いている。関係する原文は以下のものである。

・屈原曰、举世皆濁、我独清。衆人皆醉、我独醒。是以見放。

（屈原が、世の中は皆濁り、私だけが清んでいるので放逐されたと言う。）

・屈原曰、寧赴湘流、葬於江魚之腹中、安能以皓皓之白而蒙世俗之塵埃乎。

（屈原が、純白の身を濁った世の中で汚すより、投身自殺して魚の餌になる方がましだと言う。）

・漁夫：乃歌曰、滄浪之水清兮、可以濯吾纓、滄浪之水濁兮、可以濯吾足。

（漁夫が、水が清んでいれば冠の紐を洗えば良いし、

濁つていれば足を洗えば良い（状況に合わせて行動しろ）と言う。）

### 食板銘

\*まな板を擬人化してその食への耽溺を諷める銘。銘はいさめの言葉。

民之有生	民の生有るは
得食維艱	食を得ること維れ艱んず。
惟茲口腹	惟だ茲の口腹
有性自天	性の天よりする有り。
惟哲知命	惟だ哲のみ命を知り
不敢沈瀕	敢えて沈瀕せず。
几案申警	几案に警を申ぶ
嚴恪饗殮*	饗殮を嚴恪にせよ、と。
彼昏不知	彼昏くして知らず
溺心芻豢*	心を芻豢に溺る。
饗餐敗義	饗餐義を敗り
与色同愆	色と愆を同じくす。
易牙乱齐	易牙を乱し
阿衡昌殷*	阿衡殷を昌んにす。
矧此蒙士	矧んや此の蒙士の

敢求飽安 敢えて飽安を求むるをや。

古人有言 古人言有り

咬得菜根\* 菜根を咬み得る、と。

【注】○饗殮：饗は朝食、殮は夕食。○芻豢：家畜。転じてご馳走の意。○饗餐：飲食を貪るとされる悪獣。青銅器の裝飾に多く用いられた。○易牙：齊の桓公の宦者。厨房を司り桓公の寵愛を受けた。君主に取り入るために自らの子を料理した故事（「蒸子食君」）で有名（「韓非子」十過篇、二柄篇、「管子」小称篇などに見える）。

○阿衡：殷代の名宰相、伊尹の職名。『蒙求』の「伊尹負鼎」の項に、伊尹が湯王に仕えるために料理人になり、遂に志を得て宰相の位にのぼったことを述べる。○咬得菜根：朱子『小学（外篇）』末尾に、汪信民の言葉として「人常咬得菜根、則百事可做」とある。『呂氏師友雜録』に因る言葉だと言う。貧窮の中に大事をなす素地ができる、の意。また、この言葉に題名を取った明代の洪自誠の『菜根譚』も有名。

### 【訳】

庶民の生活においては、食を得ることが問題だ。この飲食は、天性によるものだ（どうしようもない）。

ただ賢人だけが天命を知って酒食に耽ることがない。

机の上に「食事を慎め」という警句を書いて、

彼は蒙昧無知にして、ご馳走に耽溺する。

饕餮とうてう（\*ここでは心の悪い面を言うのであろう）が道義

を破り、色欲と罪を同じくする。

易牙えきがは（道義に背いた飲食で）斉の国を乱し、〔一方〕

伊尹は殷を盛んにした。

〔古の賢人さえこのように様々あった。〕ましてやこの蒙

昧の士が満腹や安逸を求めるのはどうしようもない。

古の人は次のように言った。

草の根を噛め〔そうすると何事も成し遂げることができ

る〕、と。

### 履軒吟

\*履軒が自らの生き方を表明した詩。履軒という号に託した思いが読み取れる。

寥々乎林之丘乎

浩々乎河之洲乎

飄々乎天之衢乎

隱々乎山之幽乎

氣象之殊兮有昼夜乎

寥々たり 林の丘

浩々たり 河の洲

飄々たり 天の衢かど

隱々たり 山の幽

氣象の殊なるや 昼夜有るも

吾心所適兮無春秋乎

紅塵不至兮白丁弗遇

披陳編兮尚友兮前修

務遠心之害兮

胡憫乎躬之疾

嗟嗟、履之无妄兮\*

庶幾乎彷彿

中而下位兮

剛而能屈

我其夙夜

履道之坦兮

享貞之吉

優哉游哉

聊以卒歲兮度日

吾心適う所 春秋無し。

紅塵至らず 白丁遇わず

陳編を披ひらきて 前修を尚友す。

務めて心の害を遠ざけ

胡ぞ躬みの疾を憫まんや。

嗟嗟、之を履むこと妄ならず

彷彿たるを庶こゝろ幾う。

中にして下位にあり

剛にして能く屈す。

我其夙と夜に

道を履むこと之れ坦たり。

貞の吉を享け

優なるかな 游なるかな

聊か以て歳を卒おえ日を度わたらん。

【校勘】○浩々…中井木菟麻呂『懷徳堂水哉館先哲遺事』所収の「履軒幽人伝」では「演々」に作る。○妄…北山写本は「忘」に誤る。

【注】○履之无妄以下…『易経』履卦九二爻辞こゝろに「履道坦々、幽人貞吉（道を履むこと坦々、幽人貞にして吉）」とあり、その象伝に「幽人貞吉、中不自乱也（幽人貞吉とは、中

自ら乱れざるなり」とある。履軒はこれを自分の生き方の基準とした。○卒歳：『楚辞』「九辯」に見える。

【訳】ひっそりとした林。広々した川の洲。ヒューヒューと天の道。黒々とした山の深み。様々な現象により昼夜ができるが、私の心の適うところには春秋がない。俗事も至らず仕官もせず、古い書物を開き、古人を友にする。つとめて心の害を遠ざけ、どうして我が身の病を憂えよう。ああ、道を踏み行うこと正しく、「完璧は望まず」だいたいのところを目標にする。中ぐらいでありながら下位におり、剛つよいがよく屈す。朝に夕に坦々と道を踏み行い、正しい吉を受ける。「そうして」ゆつたりと、いささか年を終え、日を過こそうとしよう。

【参考】

「履軒幽人伝」（『懷徳堂水哉館先哲遺事』所収、同書には「弊帚旧稿二載ス」と言う）

幽人居一樓、南北有牖、南棚葡萄延蔓盈区、翠光撼席、実之離々可頼（フ・ふす）而哺也。故命斯樓曰、龍珠之樓。北牖之外、展枝可踞、施欄可倚、脩竹青々、傍欄而宜上者数十竿矣。扁其上曰履、志其脩也。故自号曰、履軒幽人。性多病不喜出、不邀客、終日兀坐、凶書著作之

外、無復嗜好也。讀書又不能彊力、每未及倦而輟、輒倚梧对此君、隱几眄龍珠、清風時來、簷鐸鏘然、幽人意甚適也。若斯者十年如一日、蓋將以是自終焉者也。其所誦詩曰、

寥寥乎林之丘乎、：

詠史（史を詠ず） 孔安國

\*孔安國は、前漢の儒者。孔子旧宅の壁から発見されたという古文の『尚書』、『論語』を献じたことで有名。

漢家尊礼執唾壺\* 漢家礼を尊び唾壺を執らしめ  
僕々胡遑耻鼎問\* 僕々は胡ぞ鼎問を耻ずるに  
祖孫遺業壁中簡 祖孫の遺業 壁中の簡  
寧料大道資詰訓 寧んぞ料らんや  
大道 詰訓を資けんとは。

褒聖任他万斯年 褒聖さかもとらばあれ任他万斯年  
掌上天下不復運 掌上の天下 復びは運らず

【注】○執唾壺：『漢書』孝献帝紀注が引く『漢官儀』に「武帝時、孔安國為侍中、以其儒者、特聽掌御唾壺、朝廷榮之」と見える。○僕々：煩わしいことという意味

もあるが、ここではしもべ、下々の者の意に解した。

○耻鼎問：「耻下問」という語を踏まえると考えられる。  
『論語』 公冶長篇では「耻下問」（下問を恥じる）目下に尋ねることを恥じる（ことのないことが、「文」の要素として挙げられている（原文「敏而好学、不耻下問、是謂之文也」）。「問鼎軽重」という語「問鼎軽重」（鼎の軽重を問う）で、天下を窺うことの意があるが、ここでは関係がないと考えた。○褒聖：孔子のこと。後世に贈られた追諡の一つ。○掌上天下：『孟子』公孫丑上篇に、儒教の仁政を行えば、天下を治めることは掌上に運らすようなものだ（簡単だ）と言ったとある（原文『孟子曰、「人皆有不忍人之心。先王有不忍人之心、斯有不忍人之政矣。以不忍人之心、行不忍人之政、治天下、可運之掌上」』）。

【訳】漢王朝は礼儀を尊んで（孔安国に）儒者に皇帝の痰壺を管理させ、下々の者は（礼儀の習得に忙しく）、どうして儀式の鼎について尋ねることを恥じている暇があるうか？ 祖先の遺業である壁の中の木簡が、大道の訓話の助けになるとは思いも寄らなかった。（だが）孔子の時から万年経って、もはや天下を掌上に運らすことはできない。

題夢蝶図（夢蝶図に題す）

\*有名な「莊子」の胡蝶の夢を題材とした葩関月の画への画賛。

周之未夢兮無蝶  
蝶之方飛兮無周  
蝶果不知周乎\*  
嗟周也既知蝶之喻矣\*

周の未だ夢みざるや蝶無く  
蝶の方に飛ぶや周無し。  
蝶果たして周を知らざるか  
嗟周や既に蝶の諭しみを

周自知其遽々乎\*

周自ら其の遽々たること  
知り。

即蝶之栩栩

即ち蝶の栩栩たるを知れり。

蝶自知其栩栩乎

蝶自ら其の栩栩たること

即周之遽々

即ち周の遽々たるを知れり。

人病不知喻其所喻

人其の諭しむ所を諭しむを

必欲喻人之所喻

知らざるを病み  
必ず人の諭しむ所を諭しまんと

猶周之欲蝶於栩栩

猶お周の蝶の栩栩たるを欲し

而蝶之欲周於遽々

蝶の周の遽々たるを欲するが

一

ごとし。

【注】○不知周：『莊子』齊物論篇原文に見える。履軒『莊子雕題』は、この部分に「不知周」言蝶不自知其身本

為莊周也」と言う。○喩：楽しむ。これも『莊子』齊物論篇原文に見える語。○遽々：『莊子』齊物論篇原文に見える語。履軒『莊子雕題』は、「遽々」猶朴々、是揚々之反、即与栩々対」と言う。つまり、「栩々」は楽しげな様、「遽々」は気が晴れない様。

【現代語訳】 莊周がまだ夢をみていない時には蝶はいないし、蝶が飛んでいる時には莊周はいない。蝶は果たして莊周を知らないのだろうか。〔でも〕 莊周〔の方〕は蝶の楽しみを知っている。莊周は、自ら自分が鬱々としていることは、「実は」蝶が楽しげなことと同じであることを知っている。蝶は、自らが楽しげなことは、「実は」莊周が鬱々として同じであることを知っている。人が自分が楽しむところを楽しむことを知らないことを思い煩い、人の楽しむところを楽しむもの、莊周が蝶に楽しみを求め、蝶が莊周に鬱々とすることを求めるのと同じだ（適わぬ望み、あるいは求めるべきでない望みだ）。

【参考】 履軒の文集『弊帚統編』にも、胡蝶の夢を題材にした詩が以下の三首に見える。

題夢蝶図（夢蝶図に題す）

周之夢為蝶与。蝶之夢為周与。自千載之後觀之、蝶亦夢也、周亦夢也。栩々之与遽々、奚扞焉。嚮製此図者、亦已夢、今之題言者、独得非夢邪。則後之觀焉者、遞亦皆夢已。嗟乎、人能自知身之夢、而不動於欲、不誑於利与名、逍遙保其性、而全其天、此則善处乎夢者、斯之謂真覚。

履軒幽人夢中、筆於華胥国天楽楼偷語欄之下。

【注】 ○周之夢為蝶与：『莊子』本文にもある。○華胥国天楽楼偷語欄：履軒は自分の居宅、書齋、書齋の欄干をこのように名づけた。華胥国とは、黄帝が夢に遊んだとされる古代の理想国で、『列子』に見える。天楽とは、『莊子』天道篇の「与人和者、謂之人楽。与天和者、謂之天楽（人の和に与る者、之を人楽と謂い、天の和に与る者、之を天楽と謂う）」に因る言葉で、高い境地の楽しみを言う。また、偷語とは、いい加減な言葉。履軒が自分が放言する様を謙遜して言ったもの。『春秋左氏伝』襄公三十一年に、叔孫豹が趙孟の死を予言し「趙孟将死矣。其語偷、不似民主（その言葉がなおよざりてとても君主のように見えない）」と言ったとあることに基づく。履軒著『弊帚統編』には、「華胥国記」、「天楽楼記」、「偷語



欄戒約」という文章が見える。

【書き下し文】周の夢に蝶と為るか。蝶の夢に周と為るか。千載の後より之を覩れば、蝶亦た夢なり、周亦た夢なり。羽々の遽々と、奚れか扱ばん。嚮に此の図を製する者、亦た已に夢なり、今の題言する者、独り夢に非ざるを得んや。則ち後の焉を覩る者、遞いに亦た皆な夢のみ。嗟乎、人能く自ら身の夢たるを知り、欲に動かず、利と名とに誅れず、逍遙として其の性を保ち、其の天を全うすれば、此れ則ち善く夢に処する者にして、斯れを之れ真覚と謂わん。

履軒幽人夢中に、華胥国天楽楼偷語欄の下に筆す。

【訳】 莊周が夢で蝶になったのか、蝶が夢で莊周になったのか。千年の後から見れば、蝶もまた夢、莊周もまた夢である。楽しげなものがっかりしているのと、どちらも変わりはない。先にこの図を作った人は、すでに夢（幻）と消えていった。今、題辞を書く人も夢（幻）と消えていき、後にこの図を見る人も、夢（幻）と消えていくであろう。ああ、人が自分の身が夢（幻）であることを知り、欲に動かされず、名利の誘惑を受けず、悠然と養生し、その天性を全うできれば、これがすなわち夢によく

対処するする者であり、これを真覚（本当に覚めている者）というのだ。

履軒幽人が夢の中で、華胥国天楽楼偷語欄のもとで記す。

【解説】 莊子よりさらに高みに立ち、すべては夢であるという。

題夢蝶図（夢蝶図に題す）

周之覚之遽々、而羨蝶之夢之栩栩、其亦有味哉。夫転世輪廻、苟信有焉、吾願従事焉。如牛之臥嚼草、鶴之舞于天、夏魚之浮游、秋虫之悲吟、可羨者亦多矣。夫畏転輪者、不知何悲。

【書き下し文】 周の覚むるや遽々たりて、蝶の夢の栩栩たるを羨むは、其れ亦た味有るかな。夫れ転世輪廻、苟も信に焉有れば、吾焉に従事せんことを願う。牛の臥して草を嚼み、鶴の天に舞い、夏魚の浮游し、秋虫の悲吟するが如き、羨むべき者亦た多し。夫れ転輪を畏る者、何を悲しむかを知らず。

【訳】 莊周が覚めている時にはがっかりしていて、蝶が夢で楽しげなことを羨むのは、また味があることだ。本



当に輪廻転生ということがあれば、私はぜひ体験したいものだ。牛が寝転がって草を噛んだり、鶴が天に舞ったり、夏の魚が遊泳したり、秋の虫が鳴いたりなど、羨むべきものは多い。輪廻転生を畏れる者は何を悲しんでいるのか理解できない。

【解説】 仏教では苦しみと見る輪廻を、相対的視点からまたよしとし、動物となるのもよいではないかと言う。

題画蝶（画蝶に題す）

栩栩然、蝶之樂也至矣。豈吾精魂所化耶。抑千載之前、莊周所化、儼然猶存于今耶。醉中夢思朦朧、不能辨是非、且録此、以問於觀者。

【書き下し文】 栩栩然として、蝶の楽しみや至れり。豈に吾が精魂化する所ならんや。抑も千載の前、莊周化する所、儼然として猶お今に存するや。醉中夢思朦朧とし、是非を辨ずる能わざれば、且く此に録し、以て觀者に問う。

【訳】 栩栩として、蝶の楽しみは極まっている。もしや、私の精神が化したものなのであろうか。そもそも千年前

に、莊周が化したところが儼然として今も存在するのだろうか。酔っぱらい夢うつつの状態で、是非の判断ができないので、とりあえずここに記録して、見る人に問いたい。

【解説】 ここでは、蝶の楽しみは私の楽しみか、あるいは莊周の思いが残っているのかと嘯く。先の詩では、現実が夢（幻）であることを強調していた履軒であるが、ここでは、むしろ、時代を超越した精神の永遠性を詠っているかようである。

以上、履軒は「栩栩」「遽々」（うれしい感情と悲しい感情）という言葉も多く取り上げている。「遽々」を「栩栩」と対にし、鬱々たる状態をいうとするのは一般的訓詁ではない（成玄英疏には「驚動之貌」と言う。履軒が雕題を付けている林希逸『莊子膚齋口義』は「僵直之貌」と言う。この注釈ではないが『韻会』には「遽々」は「自得之貌」とある（履軒と全く逆）。それをわざわざ対に解釈し、この一節は幸福感が云々したものにとらえる点に履軒の特徴がある。やや強引だと言えるが、履軒の特徴（世俗的幸不幸から解放されたい？）がよく表れた箇所と言えよう（拙稿「中井履軒の老莊観」の末尾近く「履

軒の思想が表れた部分」の履軒の人生に対する考えを参照されたい。

【参考】画に関する情報

履軒の孫の『並河寒泉遺稿』巻八(丁巳稿(安政四年)一ノ上、第八)二十五葉「安政丁巳仲冬」に「書幽人先生賛莊周画幅匣陰」という文章がある(注)。これによれば、蔀閨月(一七四七〜一七九七)の画に履軒が賛を付けたものと言う。題名からすると「題夢蝶図」なのであろう。

(注) 原文「莊生夢蝶図、閨月蔀氏画之、幽人先生賛之。賛辞取在先生『弊帚』中、其賛辞蓋是幅而成焉者、可珍襲焉。嘗聞斯幅也、丹丘釀家某氏所藏、今也転為他家之藏、是亦莊生夢蝶妄幻之所以驗也与。噫」。

蔀閨月については、高松良幸「蔀閨月の画業―懐徳堂との交流を中心に」(『フィロカリア』十一号、大阪大学文学部美学科、一九九四年)が詳しい。同稿では、蔀閨月が一七八三年から一七九二年まで懐徳堂に住んだことや、その画に竹山や履軒の賛が多く見られることが紹介されている。ただし、「莊生夢蝶図」については言及さ

れていない。

竹山が賛を着けた蔀閨月の画には確認できるものは以下のようである。一つは、「海楼之図」(「関西大学所蔵大坂画壇目録」一二九頁)の「巋矣城楼、煥矣丹青、滄溟万里、坐我洞庭(竹山居士題)」というもので、『箕陰集(詩集)』巻三(影印本三一頁)に「岳陽楼図賛」として見える。もう一つは、蔀閨月筆、中井竹山賛「春花見図」(大阪大学懐徳堂文庫蔵121 042 001、平成十年購入、『懐徳』六七彙報に紹介あり)である。

靚青赤二神相撲図、戯題

(靚青赤二神相撲図を靚、戯れに題す)

\*画賛。どのような画であったかは未詳。博雅の士のご教示を仰ぎたい。

赤者南極之老耶

赤は南極の老か

青者東帝之使乎

青は東帝の使いか

\*争霊功兮不相下

霊功を争いて相い下らず

ト贏兮一場戯

贏うらなちをトウ一場の戯

【校勘】○争…「救済」を見せ消ち。○兮…「争」を見せ消ち。○相下…「決」を見せ消ち。○ト…「輸」を見

せ消ち。○兮…「枉付」(?)を見せ消ち。

【注】○南極之老…七福神の中の寿老人のことを南極老人とも言う。○東帝…未詳。

【訳】赤い方は南極老人(寿老人)であろうか。青い方は東帝?の使いであろうか。靈功を争って相い下らず、雌雄を決せんと一試合交える。

婿語婦(婿婦に語る)二首

\*婿が嫁に語る詩。履軒は、宝暦十三年(一七六三)に革嶋みわを娶っている。この詩は、配列順からすると、それより以前に書かれたものであると思われる。

貯爾無金屋 爾を貯うるに金屋無く

紙窓任爾補 紙窓、爾の補うに任す。

借問鮑宣妻 借問す 鮑宣の妻

有短布裳無 短き布裳有りや無しや、と。

伯姒爾兄弟 伯姒は爾の兄弟にして

阿姑爾阿母 阿姑は爾の阿母なり。

我短向他説 我的短は 他に向かいて説くも

向我莫説他 我に向かいては 他を説く莫かれ。

【注】○鮑宣妻…桓少君。裕福な出身であったが、自ら進んで貧しくして贅沢を好まない夫に従い、賢婦として称えられたと言う。『後漢書』鮑宣妻伝に短い衣裳を着た(「著短布裳」とある。

【現代語訳】お前を住まわせるのに立派な屋敷もなく、障子はお前が繕うに任せる。ちよつとお尋ねする、鮑宣の妻よ、短い衣裳はあるか(貧乏の覚悟はできているか)。義理の姉もお前の実の姉だ、姑はお前の実の母だ。私の短所は彼らに告げてもよいが、彼らの短所は私に告げるな。

小婦釣魚(小婦魚を釣る)

\*釣りに慣れない若い娘が青年に助けを求める様子を詠った詩。

未慣釣魚術 未だ釣魚の術に慣れず

釣餌倩郎理 釣餌は倩郎が理む。

更請釣出時 更に請う、釣り出だす時

為儂卸魚鯢 儂の為に魚鯢を卸せと。

【訳】 まだ釣りには慣れず、エサや釣鉤は若者任せ。その上さらに、釣り上げた時には私のために鰓から針を外してちょうだいとおねだりする。

霜葉

\*霜葉は紅葉のこと。

喚霜染我衣 霜を喚びて我が衣を染め  
呵風戒我駕 風を呵りて我が駕を戒む。  
料知草玄人 料り知る草玄の人の  
奇字待我写 奇字我が写すを待つを。

【注】 ○草玄：漢の楊雄作の『太玄経』の別名。後、世  
事から離れて著述に専念することを言う。○奇字：『漢  
書』芸文志に書体の一つとして見えるが、ここでは、奇  
なる字、あるいは文章と解した。

【訳】 霜を喚んで私の衣を染め、風をしかって私が舞い  
上がるのを押さえる。おそらく、風流人が妙なる文字(文  
章)(紅葉が美しい文をなすことを喩えるか)を私が書  
くの待っているのだろう。

擬唐詩(唐詩に擬す)

\*【解説】を参照されたい。

人言生男好 人は男を生むは好しと言うも  
争知父母情 争でか父母の情を知らんや。  
生女不下堂 女を生めば堂を下されざるも  
生男向辺城 男を生めば辺城に向かう。

【訳】 人は男を生むのがよいと言うが、どうして、父母  
の情を知りえようか。女を生んでも離縁はされないが  
(?)、男を生めば辺疆の城に向かうことになる。

【解説】 息子を生むよりも娘を生む方が良いと詠う唐詩  
に、以下のようなものがある。

・杜甫「兵車行」 「信知生男悪、反是生女好。生女猶得  
嫁比隣、生男埋没随百草。」  
・白居易「長恨歌」 「遂令天下父母心、不重生男重生女。」

周道有松

\*『詩経』風の四言詩で讃岐の良医尾池恭菴の長寿を祝す。竹山『笈

陰集(詩集)』卷二に「寿恭菴医士六表詞二闕」(影印本二九三頁)  
がある。履軒の詩も同じ時(竹山は吉野行(宝暦十三年(一七

六三二の頃）に書かれたもので、恭菴の還暦を祝う詩なのであろう。讃岐は、懷徳堂初代学主の三宅石庵が四年滞在したこともあり、懷徳堂と繋がりがあった。

周道有松、寿尾池恭菴也。恭菴、讚之良医、邦人仰之如神。故詩人賦此、使讚人歌以送觴。

「周道有松」は、尾池恭菴を寿ことほくなり。恭菴、讚の良医にして、邦人之を仰ぐこと神の如し。故に詩人此を賦し、讚人をして歌いて以て觴さかづきを送らしむ。

周道有松 周道 松有り

其陰翳々 其の陰 翳々。

君子寿考\* 君子 寿考し

靡勩我思 我が思いを勩つかる靡なかれ。

周道有松 周道 松有り

翳々其陰 翳々たり 其の陰。

君子豈楽 君子 豈がらく楽し

実慰我心 実に我が心を慰む。

周道有松 周道 松有り

可以留連 以て留連すべし。  
彼其之子 彼れ其の子  
邦之司命 邦の司命。

我有父母 我に父母有り  
我有稻梁 我に稻梁有り。  
君子之光 君子の光

俾我能養 我をして能く養わしむ。

我有子兮 我子有り

我有孫兮 我孫有り。

君子有祉 君子祉有り

庶幾靡患 患ない靡なきに庶ちか幾し。

父母生我 父母 我を生み  
誰俾我寿 誰か我をして、寿いのちながからしむ。

欲報之徳 之が徳に報いんと欲して

我心悠々 我心悠々たり。

春酒在瓶 春の酒は瓶に在り

嘉肴在俎 嘉まじき肴は俎またに在り。

酌言献之 酌さくみて之を献じ

酌言献之 酌さくみて之を献じ

以永厥祜

以て厥の祜を永くす。

春酒盈瓶

春の酒は瓶に盈ち

穠花盈庭

穠れる花は庭に盈つ。

且歌且舞

且つ歌い且つ舞う

君子之堂

君子の堂。

黄髮台背\*

黄髮台背を

母謂一家之慶

一家の慶びと謂う母かれ。

祈爾永年

爾が永年を祈るは

維百里之寿星

維だ百里の寿星なればなり。

周道有松、九章章四句

【注】○周道…『詩経』「小雅」「四牡」などに見える。大

きな路の意。○寿考…長生きの意。『詩経』「大雅」「行葦」

に見える。○酌言…言は助字。酌言は、『詩経』「小雅」「瓠

葉」に見える。○台背…しみ肌。『詩経』「大雅」「行葦」

に見える。○百里…方百里の地。転じて一県の地。

【訳】

大きな路に松があり、その陰は深々としています。君子

が長生きなされ、私は安心していられます。

大きな路に松があり、深々としています、その陰は。君子が  
お楽しみあそばされ、私の心は慰められます。

大きな路に松があり、引き留められます。あなた、その人は、  
国の重要な救い主です。

私に父母がおり、食べ物もあります。君子のお光により、私は  
養生することができます。

私に子があり、孫がおります。「これも」君子のお恵みのお陰で、  
ほとんど思いがありません。

父母は私を生み、誰が私を長生きさせるのでしょうか。この  
ご恩に報いようとして、私の心は思い悩みます。

春の酒は瓶にあり、おいしい肴は俎の上にあります。ここに  
これらを献上して、その幸せが長く続くようにしたいと思  
います。

春の酒は瓶に満ち、咲き誇る花は庭に溢れています。歌  
いかつ踊ります、君子の屋敷で。

長寿を全うされていることを一家の慶びと言わないでくだ  
さい。あなたの長寿を祈るのは、国全体の長寿星だから  
なのです。

幽情賦

\*これも履軒が自らの生き方を宣言した詩として重要。なお、「幽

「情」という語は、班固『西都賦』に見える。

履軒幽人独坐読書。思方濃、有客来勸其仕。幽人仰而笑、俯弗答。客弗憚、援古談今、問難旁午。幽人竟不有所答焉。援笔作幽情賦、以寓意。客受読焉、怡然若有領意、盛諸懷而去。其辞曰、

履軒幽人独り坐し読書す。思い方に濃なげわにして、客有り来たりて其の仕うるを勸む。幽人仰ぎて笑い、俯して答えず。客憚よらばず、古を援き今を談じ、問難すること旁午ぼうごたり。幽人竟つひに答うる所有らず。笔ふでを援きて幽情の賦を作り、以て意を寓す。客受けて読よみ、怡然として意を領りる所有るが若く、諸これを懷こに盛もりて去る。其の辞に曰く、

春日遲遲\*

春日 遅遅ちぢぢたり

鳥鳴啾啾

鳥 鳴くこと 啾啾しゅうしゅうたり。

春去在昨

春 去ること 昨きのうに在り

忽諸又来

忽たちち諸これ又来たる

四序之循環兮

四序の循環するや

紛繆繆其如馳

紛こまごま繆ま々として其れ馳はせるが如し。

感我生之易邁

我が生の邁すすぎ易やすきに感じ

思昔人兮流涕

昔の人を思おもいて涕なみだを流ながす。

噉噉、皇考之愛我\*  
誨我兮自夫未有知

噉あ噉あ、皇考の我を愛するや  
我を誨おしうるに夫の未だ知有らざる  
よりす。

言則以愈

言は則ち以て愈なほし

食則以右

食は則ち以て右みぎにす。

維方韶亂\*

維これ韶しやう亂らんするに方あたり

載就師氏\*

載すなわち師氏ししに就く(就かしむ?)。

容止是修

容止は是れ修もとめ

組紉麻枲\*

組じゆを組み麻まし枲しとり

習劉向之伝

劉向の伝を習まなひ

誦班氏之誠\*

班氏はんしの誠まことめを誦よす。

素心洵其為矢

素心もとこに其れ矢やいちを為なし

指古人兮自期

古人こじんを指さして自みづから期ます。

胡我之不揚兮

胡なぞ我の揚たかがらず

乏玉容与壞姿

玉容と壞姿くわいしとに乏なしきや。

幸無贅瘤懸於頤

幸さいいに贅瘤しゆいの頤ぎに懸かかる無なく

庶幾修飾以潔思

修飾しゆしし以て思おもいを潔きよくせんことを  
庶こい幾かう。

愧夫粉墨也乱真

夫かの粉墨こなの真まを乱みだすを愧かじ

羞於妖妍之嫵媚

妖妍あうげんの嫵媚ぶいを服はして

服彫雜兮不衷

衷あたらざるを羞かす。

鑑於詩人之刺

詩人の刺いめに鑑かみ

介然而自守  
維以与世違

介然として自ら守り  
維れ以て世と違う。

春日遲遲

春日 遲遅たり

鳥鳴啾啾

鳥鳴くこと 啾啾たり。

含哺而反

哺を含んで反り

将雛而飛

将に雛たりて飛ばんとす。

草木綺其榮茂

草木 綺として其れ榮茂し

發芬芳乎清墀

芬芳を清墀に發す。

万物得其情

万物 其の情を得

欣々其相嬉

欣々として 其れ相い嬉ぶ。

維我之独矣

維れ 我之れ独りなり

誰与而展懷

誰と与に懷いを展べん。

当冷風而奏梳(疏?)

冷風に当たりて 奏梳(疏?)し

髮鬢々兮長垂

髮鬢々として長く垂る。

臨清漣而顧面

清漣に臨みて 面を顧い

素顔映而相視

素顔 映じて 相い視る。

曳朱裾而襲素衣

朱裾を曳きて 素衣を襲

佩芳蕙兮簪花枝

芳蕙を佩びて 花枝を簪とす。

賦窈窕兮托興

窈窕を賦し 興を托し

撫錦瑟以写思

錦瑟を撫して 以て思いを写す。

景翳々漸以傾

景翳々として 漸く以て傾き

鳥声喧而掃棲

鳥声喧しくして棲に掃る。

思断続而弗接

思い断続して接らず

魂迷朦其如疲

魂迷朦して其れ疲るるが如し。

天黯淡而弗辨

天 黯淡として辨ぜず

心鬱陶其傷悲

心 鬱陶して 其れ傷悲す。

就角枕而憩息

角枕に就きて 憩息すれども

耿耿兮不成寐

耿耿として 寐りを成さず。

推衾而起以坐

衾を推して 起きて以て坐し

聊整衣而塞帷

聊か衣を整えて 帷を塞げれば

月娟々懸乎樹端

月娟々として 樹端に懸かる。

帶唐棣之瑤枝

唐棣の瑤枝を帯び

光璨々入我懷

光璨々として 我が懷に入り

氣凄々徹乎肌

氣凄々として 肌に徹す。

歎貞操之無儔

貞操の儔無きを歎き

悼歲月之徒逝

歲月の徒らに逝くを悼む。

嗟夫、世之味味兮

嗟夫、世の味味たるや。

淫辟日以熾

淫辟 日々以て熾んに

嘉治容之虚飾

治容の虚飾を嘉みす。

棄中情之貞思

中情の貞思を棄て

汨蕩々乎無所戻止

汨蕩々として 戻止する所無し。

夫天倫之炳如

夫れ 天倫の炳如たる

我胡為乎廢之

我 胡ぞ之を廢するを為さん。



輝章甫於越郷

烏知我之匪戻

毀玉而為瓦

心寧忍為之

噫、伯鸞<sup>\*</sup>弗再矣

欽徳輝于千載

維我其無所遇矣

寧幽独兮守素志

章甫を越郷に輝かせれば

烏んぞ我の戻らざるを知らん。

玉を毀ちて瓦と為すは

心寧ぞ之を為すに忍びん。

噫、伯鸞再びして

欽徳千載に輝かず。

維た我其れ遇う所無し

寧ろ幽独して素志を守らん。

【校勘】○愛我：「愛乎我」の「乎」を墨筆で消す。北山写本では残している。○就師氏：「就」は墨筆で消しているが残した。

【注】○旁午：入り交じること。○春日遲遲：『詩経』「邠風」七月、『詩経』小雅「出車」に見える。

○韶亂：齒が生え替わること。『顔氏家訓』「序致」に「昔在韶亂、便蒙誨誘」とある。○組紉麻桌：組紉はひも。麻桌は麻。これらを作れることが女子のたしなみとして

『礼記』「内則」（家庭での礼を述べる）に見える。（「女子十年不出。姆：執麻桌、治絲繭、織経、組紉。」）

○劉向之伝：前漢の学者劉向作の『列女伝』のことである。○班氏之誠：『漢書』の編纂で有名な班固の妹の

班昭（曹大家）が女子教育のために著した『女誡』七篇を言うのである。○贅瘤：名譽や位のこと。嵇康「答難養生論」に「蓋將以名位為贅瘤…」とある。○興：物に託して表現する法。古来『詩経』について「風・雅・頌、比・賦・興」の六義があると言われている。○中情：『楚辞』に多く見える。○伯鸞：後漢の梁鴻の字。梁鴻は人に頼らず行いを全うした人。履軒が彫題をつけている「世説新語補」徳行上」に見える。なお、『履軒古風』卷三「祭亡妻」では「十載伯鸞妻」と自分を伯鸞に喩えている。

【訳】履軒幽人が独り座り読書し思考が深まっていたその時、客が来て仕官を勧めた。幽人は顔を上げて笑いうつむいて答えなかった。客は気分を損ね、昔を例に今を談じて質問責めにした。幽人は終始（とうとう）答えず、筆を引き幽情の賦を作って思いを託した。客は受けてこれを読み、なるほどと思いを悟ったようで、これを懐にしまつて帰つていった。その言葉は次のようであった。

春の日はうらうら、鳥はちゅちゅと鳴く。

春が去つたのは昨日なのに、たちまちまた来る。

四時が循環するのはごうごうと駆けるかのようだ。

我が人生の過ぎやすいのを感じ、昔の人を思つて涙を流す。

ああ、亡き父は私を慈しんでくださった。

私が物心つかないうちから教育し、言葉を直し、箸を右手に持たせてくださった。

齒の生え替わる頃には、教師をつけ、容儀を修めさせてくださった。

紐の編み方や麻の取り方を習い、劉向の『列女伝』を習い、班氏の『女誡』を暗誦した。

先人を目標にしようと、心から誓いを立てた。  
〔それなのに〕なんと私の不甲斐ないことか。

見目麗しくもなく、ただ余計な瘤がぶら下がっていいことを幸いに、行いを慎み、思想を清くすることを願う。

女性の化粧に惑わされることを羞じ、美人の媚びが純粹でなく心正しくない(下心に満ちている)のを羞じる。

詩人の諫めに鑑みて、堅く自ら守り、そのため世の中と合わない。

春の日はうらうら、鳥はちちつと鳴く。  
餌を含んで帰り、雛が飛び立とうとする。

草木は美しく茂り、清い庭に芳香を放つ。

万物はその情に適い、にこにここと喜び合う。  
ただ私だけがひとりぼっちで、誰に思いを述べることができようか。

冷たい風に当たり思いを述べ(髪をとかす?)、髪は乱れ長く垂れる。

清い漣に臨み顔を洗えば、素顔が映って、見つめあう。  
朱色の裾を白い衣に重ね、香草を身に纏い、花の枝を簪にする。

美しきを賦し、感興を託し、錦の琴を奏でて思いを表す。  
影は黒々と次第に傾き、鳥は喧しく鳴いて巣に帰る。

思いは切れ切れでつながらず、魂は混迷して疲れたようだ。  
天は暗澹としてよく見えず、心は鬱屈して痛み悲しむ。

角枕について休もうとするが、意識がはつきりして寝られない。

布団を推して起きて座わり、いささか衣服を整えて帳を上げれば、

月は清らかに梢に懸かり、唐棣(\*履軒著『画簾』えくけん)によれば「はねず」が玉のような枝を帯びている。

光が燦々と私の懐に入り、空気は凜として肌突き通る。  
貞操を守る同志がいらないのを嘆き、歳月が無駄に過ぎていくのを悼む。

ああ、世の中の暗いことよ。  
よこしまが日々盛んになり、なまめかしい姿の虚飾をよしとする。

哀情の正しい志を棄て、ゆらゆらさまよい 戻ることが

ない。

そもそも天の道の明らかなるものを、私はどうして廃す  
ことができよう。

儒冠を異郷に輝かせれば（他の地方に仕官すれば）、ど  
うして私が戻らないことを知ろう（必ず戻る）。

玉を壊して瓦とすることは、どうしてなすに忍びよう。  
ああ、「独り徳行を全うした」伯鸞が再び現れ、徳を千  
載に輝かすことはない。

私は世の中と合わない。  
むしろ独り静かに清き志を守るとしよう。

**有感（感有り）**

\*これも自らの思いを述べた詩。

読書破万卷

読書一万卷を破るも

身上無一成

身上一つも成る無くんば、

雖多其何益

多しと雖も其れ何の益あらん

均不知一丁

一丁を知らざるに均し。

傲然誇俗士

傲然として俗士に誇り

皐比坐揚揚

皐比に坐すること揚揚たり、

是謂為他人

是れを他人の為に

裁縫嫁衣裳\*

嫁の衣裳を裁縫すると謂う。

窃痛此風長

窃かに此の風長ずるを痛み

惕然以自警

惕然として以て自ら警む。

言之若甚易

之を言うは甚だ易きが若きも

踐之实匪輕

之を踐むは実に輕からず。

眇眇我所服

眇眇たり我が服す所

日夕勞經營

日夕 經營を勞す。

短褐雖不温

短褐 温かからずと雖も

庶幾以自養

以て自ら養うを庶幾う。

【注】○皐比：虎の皮。転じて、講義の席。○為他人裁

縫嫁衣裳：他人のために働くこと（秦韜玉「貧女」詩）。

また、『論語』憲問篇に「古之学者为己、今之学者為人」

とあるのを参照。○短褐：貧しい人の喩え。ここでは徳

を言うか。

【訳】万卷の書を読破しても、何も身に付いていなければ、

多いと言っても何の益があろう。一字も知らないのと同

じだ。傲慢に一般人に誇り、得意げに講義の席に着く。

こういうのを「他人のために嫁入り衣裳を作る」という  
のだ。「私は」密かにこの風潮が蔓延するのを痛み、慎  
んで自らを諫めている。これを言うのは簡単なようだが、  
実践するのは実に難しい。私が実行できるのはわずかな

ことだが、朝に夕に努力する。短い衣は温かくはないが、自分を養えればいい(養うことを希望する)。

城南墳

\*明和元年(一七六四)、履軒が師の五井蘭洲の墓参りをした際の作。自らの不甲斐なさを嘆く。五井蘭洲は宝暦十二年(一七六二)亡くなり、現大阪市天王寺区にある実相寺に葬られた。

甲申之歳

甲申の歳

季春之望

季春の望、

愴我夙歎

我が夙歎を愴き

歩言南行

歩みて言に南行す。

経閭閻之喧闐兮

閭閻の喧闐たるを経

臨郊野之蒼茫

郊野の蒼茫たるに臨む。

晨景慘而小雨

晨景 慘として小雨ふり

霑我之衣裳

我の衣裳を霑す。

飛花寂兮鳥音

飛花 鳥音に寂として

雜彼兮鐘磬

彼を鐘磬に雜せる。？みだす？

蕭寺綿相連

蕭寺 綿として相い連なり

墳塋累稠々

墳塋 累稠々たり。

惟人生之須臾兮

人生の須臾なるを惟うも

曾弗違乎回頭

曾て頭を回らずに違あらず。

顧瞻連甍之轟々兮

顧みて連甍の轟々たるを瞻る。

死生昼夜而相求

死生は昼夜なるも相い求め

素旆相逐

素旆相い逐い

如之或馭

之く或いは馭けるが如し

独行易感

独行して感じ易く

神愴踟躕

神愴みて踟躕す。

肆上実相之丘兮

肆に実相の丘に上り

展苔墳而洒掃

苔墳に展りて洒掃す。

維先師之幽室兮

維れ先師の幽室なり。

懷音容而灑涕

音容を懷いて涕を灑ぐ。

歎日月之遄逝兮

日月の遄かに逝くを歎くに

再期之忌歎將至

再期の忌 歎ち將に至らんとす。

夫箕裘之莫繼兮

夫れ箕裘の継ぐ莫く

誰其頌德而紀事

誰か其の徳を頌え事を紀さん。

弟子故旧兮

弟子故旧

揮淚以相規

涙を揮いて以て相い規る。

謂我兄弟兮

謂く我が兄弟

久学且芸

久しく学び且つ芸あるを。

兄也撰辞\*

兄や辞を撰し

弟也制字

弟や字を制す。

爰咨爰謀

爰に咨り爰に謀り

遂濟其志

遂に其の志を濟ぐ。

買石命工  
 是董<sup>\*</sup>是視  
 碑成孔懿  
 適今之時  
 載建栽植  
 載土載築  
 環之以棘  
 有暉花樹  
 以照其域  
 其人如玉  
 整衣拜跪  
 傾衷情以懇思  
 噫、民之生于三兮  
 我独隠淪於草野  
 遭疾之未瘥兮  
 復遭師之徂  
 心旃旒而弗繫兮  
 胡我生之多岨  
 惆悵以思念兮  
 伊遺音之誘我  
 矢心其循止  
 豈謂報徳乎

石を置いて工に命じ  
 是れ董<sup>はか</sup>り是れ視<sup>はか</sup>  
 碑成り孔<sup>はな</sup>だ懿<sup>よ</sup>。  
 今の時に適<sup>あ</sup>たり  
 載<sup>すなわ</sup>ち建て載<sup>た</sup>ち植<sup>て</sup>  
 載<sup>すなわ</sup>ち土し載<sup>た</sup>ち築<sup>く</sup>。  
 之を環<sup>か</sup>らすに棘を以てし  
 暉<sup>ちか</sup>かの樹有り  
 以て其の域を照らす。  
 其の人玉の如し。  
 衣を整え拜跪し  
 衷情を傾け以て思いを懇<sup>うた</sup>う。  
 噫、民の三に生まるるや  
 我れ独り草野に隠淪し  
 疾<sup>やま</sup>の未だ瘥<sup>い</sup>えざるに遭<sup>あ</sup>い  
 復た師の徂<sup>ゆ</sup>くに遭<sup>あ</sup>い  
 心旃<sup>は</sup>旒<sup>は</sup>として繫<sup>ひ</sup>がれず。  
 胡<sup>な</sup>ぞ我が生の岨<sup>せ</sup>多きや。  
 惆悵<sup>ちゆうたう</sup>して以て思念<sup>し</sup>す。  
 伊<sup>い</sup>れ遺音<sup>い</sup>の我を誘<sup>い</sup>い  
 心<sup>こ</sup>に其の循<sup>じゆん</sup>止<sup>し</sup>するを矢<sup>や</sup>う。  
 豈<sup>あ</sup>に徳に報<sup>ほう</sup>いると謂<sup>い</sup>わんや。

心愼無為  
 此之長歌  
 心愼<sup>いきてお</sup>れども為<sup>な</sup>す無<sup>な</sup>く  
 此<sup>こ</sup>に之<sup>これ</sup>れ長歌<sup>ちやうか</sup>す。

【校勘】○董：北山写本は「薰」に誤る。

【注】○兄也撰辞：『大阪訪碑録』（浪速叢書一〇）（浪速叢書刊行会、一九二九年）に実相寺の五井蘭洲の墓碑文がある。末尾に、「中井積善撰 弟積徳書並篆額」とある。また、『寛陰集（文集）』卷三（影印本四八頁）に「祭蘭洲五井先生文」（宝曆十二年（一七六二）、竹山三十三歳）がある。また、同卷（影印本五五頁）に「蘭洲先生墓表」（宝曆十三年（一七六三）五月）も題のみ記されている。

【訳】甲申の歳（明和元年（一七六四））、三月十五日、私のかねての嘆きのため息をつき、徒歩で南に向かった。喧しい町中を過ぎ、青々と広がる郊外の野に臨んだ。朝の景色は寂しげで小雨が降り、私の衣を濡らす。鳥の声の中、花びらが静かに散り、鐘の音が聞こえる（割って入る？）。寺院が連綿と続き、墳墓が重なり合う。人生が短いことは知っていたが、これまで振り返る余裕がなかった。連なる薨が高く聳えるのを見る。死生は昼夜のようにはかないのに追い求め、旗を奪い合い（権力闘争

五井蘭州墓



し）、奔走するようだ。独り行けば感じやすく、気持ちがふさいで行きなすむ。ようやく実相寺の丘に上り、苔むす墓に参り掃除する。これが先師の幽室だ。お声とお姿を思い出して涙を流す。時間が速やかに過ぎるのを嘆くうちに、三回忌がもうすぐ来る。先師の学を継ぐ者ではなく、誰がその徳を頌え事跡を記そう。弟子と旧友は、涙を拭って相談した。「結果」我が兄弟は、久しく学問しかつ文才があるとのことで、兄が文辞を撰し、弟が文字を書いた。よくよく考え、遂に念願を遂げた。墓石を買って石工に命じ、よくよく相談し、墓碑はけっこうに



五井蘭州の墓のある実相寺の門（上本町）（二〇〇八年四月一九日 著者撮影）



仕上がった。この時、墓標を建てて、土を固め、築き上げた。その周りに棘をめぐらせ、麗しい花の木を植えて、あたりを照らした。かの人は玉のようなお方だった。衣服を正して拝礼し、衷情を傾けて我が思いを訴える。ああ、民が三界（迷い多きこの世）に生まれるや、私独りが在野に埋没し（隠れ）、病氣も癒えず、さらに師の逝去に遭遇し、心が揺れ動き落ち着かない。どうして私の人生には障害が多いのだろう。悲しみ嘆き思い悩む。師の声が私を導き、心に遵守することを誓う。「だが」どうしてその徳に報いると言えようか。腹立ちを感じながらどうすることもできず、ここにこの長歌を賦した。

錦雉賦

\*錦雉は、おそらくはキンケイ（口絵2参照）。博物学史上の資料としても重要。特に、履軒の描写は注目に値する。

夫羽族之多類、固紛綸難窮譬\*。或因德賞、或以才媚、或懷臭味而登俎、或籍文章兮飾君子之儀、簡冊所記、拳不可備。

我觀錦雉之狀、実雉而錦文、朱身輝兮孔陽、翠翰翮其琅玕\*、金線環頸而婆娑\*、頂糸彪其如弁。是其概而可言者。若夫五采相繆\*、鬱郁縹以續紛\*、糾錯如綺、比連如淪、如

画如刻、如貝如鱗、則目不可究察焉、矧口可得談哉。洵羽族之鍾美、豈孔翠之足論。我独傷其離故土而飄零也、撫籠而唁之、因称曰、

夫<sup>そ</sup>羽族の類の多きは、固より紛綸として窮譬し難し。或いは徳に因りて賞され、或いは才を以て媚び、或いは臭味を懷<sup>いだ</sup>きて俎<sup>また</sup>に登り、或いは文章を籍<sup>か</sup>りて君子の儀を飾り、簡冊記する所、挙げて備うべからず。

我錦雉の状を觀るに、実に雉にして錦の文、朱身輝きて孔<sup>はな</sup>だ陽<sup>あき</sup>らかに、翠翰翮として其れ琅玕たり、金線頸を環りて婆娑たり、頂糸彪として其れ弁<sup>とま</sup>の如し。是れ其の概ねにして言うべき者なり。若し夫の五采相い繆<sup>も</sup>り、鬱郁として縹<sup>じよく</sup>として以て續紛たり、糾錯すること綺<sup>あや</sup>綺<sup>ま</sup>の如く、比連すること淪<sup>さざなみ</sup>の如く、画の如く刻するが如く、貝の如く鱗の如きは、則ち目究察すべからず、矧<sup>い</sup>や口談ずるを得べけんや。洵<sup>まこと</sup>に羽族の鍾美にして、豈に孔・翠の論ずるに足らんや。我独り其の故土を離れて飄零するを傷み、籠を撫して之を唁<sup>なぐさ</sup>み、因りて称して曰く、

嗟爾遐産於海表之國、嗟<sup>あ</sup>爾<sup>な</sup>遐<sup>ん</sup>く海表の國に産し、娟妙姿兮自累重、娟<sup>け</sup>なる妙姿を自ら累重し、凌波濤兮万里、波濤を万里に凌<sup>た</sup>え

淹萍跡于茲邦  
祈愛顧乎通人

寄微命於樊籠

木葉飄兮秋風

氣凜々兮寒空

望家山兮引領

雲千重兮万重

恋旧林兮抗音

誰其察爾之恫

楚囚之悲兮

胡爾無辜而遭斯憫凶

於是雉方步玉趾寢金弁

搖瑤鬢而啄黃粒

聽斯言也

載勃々而業々

鼓翼而徐進

復顧而却立

若欲語而不能

似將辨而弗及

萍跡を茲の邦に淹む。

愛顧を通人に祈り

微命を樊籠に寄せ

木葉 秋風に飄い

氣 寒空に凜々たり。

家山を望みて領を引くも

雲は千重に万重たり。

旧林を恋い音を抗くするも

誰か其れ爾の恫みを察せんや。

楚囚の悲しみなり。

胡んぞ 爾 辜無くして斯の 憫凶に遭う。

是に於いて雉 方に玉趾を歩み

金弁を寢て

瑤鬢を揺らして黄粒を啄むに

斯の言を聴くや

載ち勃々として業々とし

翼を鼓して徐るに進み

復顧し却立し

語らんと欲して能わざるが若く

將に辨ぜんとして及ばざるに

似たり。

噫我知之

吾過矣吾過矣

今夫貴遊之門

素封之家

宝遠物而胥傲

尚異物而相誇

畜錦雉者

豈趨十百數

胡海外之貢

若斯之繁且多

故踰海之禽

於今為曾為祖

而今之所有 咸卵翼於樊籠之中者

條桷為山兮

竹欄為林

板屋為蒼穹兮

頃歩之地為平原

一勺盤水兮

為澗谷源泉

曾無家山兮可望

噫我之を知れり。

吾過れり 吾過れり。

今夫の貴遊の門

素封の家

遠物を宝として胥い傲い

異物を尚びて相い誇り

錦雉を畜うる者

豈に趨だに十百數ならんや。

胡んぞ海外の貢ぎ

斯くの若く繁く且つ多きや。

故に海を踰ゆるの禽

今において曾と為り祖と為り

今の有る所 咸な樊籠の中に卵翼する

條桷を山と為し

竹欄を林と為し

板屋を蒼穹とし

頃歩の地を平原と為し

一勺の盤水を

澗谷の源泉と為し

曾て家山の望むべき無く

者にして



又無旧林兮可恠  
宜也乎怪於吾斯言矣

又た旧林の恠<sup>おそ</sup>べき無し。  
宜<sup>む</sup>なるかな 吾<sup>ご</sup>が斯<sup>こ</sup>の言<sup>ご</sup>を

嗟爾之為生

嗟<sup>あは</sup>爾<sup>なんじ</sup>の生<sup>な</sup>たるや

怪しむは。

肉臭腥兮不可食也  
声啾啾兮不可聽也

肉 臭腥にして食らうべからず  
声 啾啾として聴くべからず。

既無德可稱兮

既に徳の稱すべき無く

又無聰慧之性

又た聰慧の性無く

徒以采色兮媚媮於人

徒らに采色を以て人に媚媮し

而不足以飾儀表兮壯觀望

儀表を飾るを以て

独拘囚於狎狎兮

觀望を壯んにするに足らず  
独り狎狎に拘囚さるるも

載揚々以為性所然

載<sup>すなわ</sup>ち揚々として

以て性の然る所と為し

弗悟野禽肥乎得意

野禽の意を得て肥ゆるを悟らず

翻慍怒乎仁人之言

翻りて仁人の言に慍怒す。

信可哀而憫

信に哀れみ憫れむべし。

雖然爾微物也已

然りと雖も爾<sup>なんじ</sup>微物なるのみ。

我又安知無人而類斯禽焉哉

我 又た 安んぞ

人にして斯の禽に類する無きを知らんや。

【校勘】○噫……「嘻」を消す。○兮……手稿本では、「兮」

を「可」に直しているようだが、諸本により「兮」が適当であると判断した。

【注】○紛綸……多くて乱れること。○窮譬……譬は説明するの意。○翠翰……翰は羽の意。○琅玕……美しい様。

○娑娑……舞う、ゆったりする。○繆……合わさる。交わる。

○鬱郁……綾が盛ん。○續紛……乱れる様。○糾錯……もつれる。○勃々、業々……ともに盛んな様、動く様。○卵翼……はぐくみ育てる。○啾啾……鶏などの鳴き声の擬態。

○狎狎……牢獄。

【訳】そもそも鳥類の種類の多さは、もとより様々であつて窮めがたい。品が良いことをもって称されるものもあれば、人に媚びる才能のあるものもあり、独特の香りにより食に供されるものもあり、きれいな文様で飾りに使われるものもあり、書物に記載されるものは、枚挙に暇がない。

私が金鶏の様子を見ると、まことに雉であり、錦の文様があり、朱色の体は明るく輝き、翡翠色の羽（\*翡翠色は青緑だが、実際のキンケイの羽は主に青色）美しく翻り、金色の線が首を巡って舞い、頭上の羽が豊かです。さかのようだ。表現できる概略は以上のものである。五

色が混じり合い、様々に綾を織りなし、さざ波のように連なり、絵のようでもあり彫刻のようでもあり、螺鈿のようでもあり鱗のようでもあるのは、目で窮めることもできないし、まして口で表現することもできない。まことに鳥類の美の粹であり、孔雀や翡翠も論ずるに足るまい。私は、ひとり、その故郷を離れて落ちぶれたのを傷み、籠を撫でてこれを慰めて言った。

ああ、お前は遠く海外に生まれ、艶やかなる姿を思いとし（う）、万里に波濤を越えて、この国に漂うことになった。風流人（趣味人）に可愛がられることを祈り、はかない命を籠に寄せ、木の葉は秋風に漂い、空気は寒空に凛々とする。故郷の山を望んで首を伸ばしても、雲は幾重にも重なる。故郷の林を想い声を上げて、誰がお前の傷みを察しようか。他国に囚われた者の悲哀である。どうしてお前は罪なくしてこのような憂き目に遭うことになったのか。

この時、金鶏はちようどそのおみ足を歩ませ金色のときさを逆立て、玉のようなくちばしを動かして雑穀を啄んでいたが、私の言葉を聞くと、さかんに動いて、翼をばたつかせておもむろに進み出、振り返り退いて立ち（私を何回も見て姿勢を正して立ち？）、何かを言おうとしようと言えない様子であった。



キンケイ

ああ、私にはわかった。私の間違いであった。今、あのお金持ちの方々は、遠くの物を宝として、珍しい物を尊んで競いあつており、金鶏を飼う人も少なくはない。どうして海外からの貢ぎ物がこのように頻繁で多いのであろうか。そこで、海を越えて来る鳥は、それが祖先となり、今いる鳥は、すべて籠の中で生まれ育つたもので、止まり木を山だと思ひ、竹柵を林だと思ひ、板葺きの家を大空だと思ひ、わずかばかりの土地を平原だと思ひ、一掬いの鉢の水を谷の泉と思ひ、望むべき故郷の山もかつてなく、また懐かしむべき故郷の林もない。どうりで私の言葉を怪しんだはずだ。ああ、お前の生態は、肉は臭くて食えず、声はギヤーギヤーと聞くに堪えず、称えるべき徳もなく、聡明な性質もなく、いたずらに美しい容姿をもって人に媚び、「かと言つて」儀式の飾りとしてその雰囲気厳かにすることもできず、ひとり牢獄に閉じこめられながら、意気揚々とこのようなものだと思ひ、野生の鳥が意を得て健康に過(こ)しているのを知らず、かえつて思いやりある人(\*履軒自身のことを言うのであろう)の言に憤慨する。まことに憐れむべきことだ。だが、お前は畜生に過ぎない「だから許そう」。人でこの鳥のような者がいないと誰が知ろうか。

**【参考】** 江戸時代におけるキンケイ

磯野直秀『日本博物誌年表』(平凡社、二〇〇二)によれば、江戸時代にはキンケイが頻繁にもたらされ、飼育されたり、見せ物になったりしていた。同書により、キンケイに関わる主な記述を整理してみると、以下のようになる。

キンケイは、早くに、慶長一五年(一六一〇)に献上記録が見え、水戸光圀が飼っていたという記録もある(元禄一三年(一七〇〇))。宝永二年(一七〇六)には玩弄のための鳥の飼育が禁じられたが、唐鳥は輸入され続け、宝永三年(一七〇七)にもキンケイがもたらされたとの記録がある。享保二年(一七二七)には四条河原でクジャクやキンケイが見せ物になっていた。そして、宝暦八年(二七五八)夏には、大坂の道頓堀で珍鳥の見せ物が開かれ、ここでもキンケイは見られた(『摂陽奇観』)。これは、もとは高槻藩主永井直行侯の愛鳥であった。安永二年(一七七三)、城西山人巨川著『唐鳥秘伝百千鳥』にはキンケイの飼育に成功していた記述がある。寛政一二年(一八〇〇)には江戸浅草・両国、大坂下寺町、名古屋末広町などに、人寄せに珍鳥を飼う孔雀茶屋ができ、ここでもキンケイは見られた(大田南畝は享和一年(一八〇一)、大坂の孔雀茶屋でキンケイを見ている)。

なお、孔雀茶屋の様子は、『撰津名所図会』巻二にある(下図参照)。そこには以下のように書かれている。

「孔雀は、孔子の家禽とし、文恵太子は羽毛を織て裘とし、交趾の人は翠毛を取って扇とす。ここには孔雀の錦毛の美なるを出し其外諸鳥を飼て茶店の賑ひとなす事これを俗にまねきといふ」

その他、井原西鶴『好色五人女』(一六八六)巻五「もろきは命の鳥さし」に見える(「その奥に庭籠ありて、はつがん、唐鳩、金鶏、さまざまの声なして…」)。また、『百千鳥』『飼鳥必用』には飼い方が紹介されている(『古事類苑』による)。

また、『国立国会図書館月報』二〇〇八、四(No.565)表紙に、『梅園禽譜』(天保一〇年(一八三九)序)の美しいキンケイ図が見える(「驚雉」と題されている)。

なお、履軒の時代、大坂船場の八百屋町筋には鳥を扱う商人が多く、鳥屋町筋とも呼ばれたと言う(秋里籬島著、竹原春朝画『撰津名所図会』(寛政八年(一七九六)、十年(一七九八))(七八頁図参照)。そこには以下のように書かれている。



孔雀茶屋の様子 (『撰津名所図会』巻二)

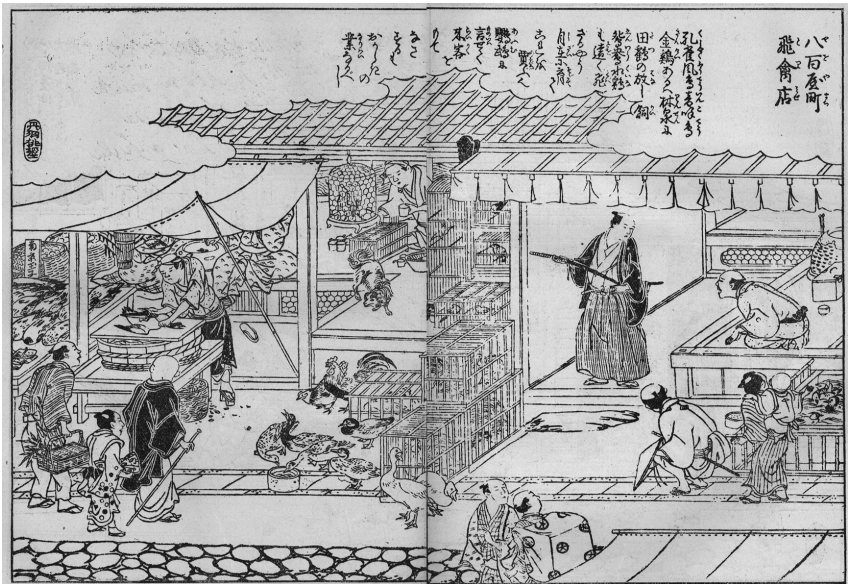


「孔雀、風鳥、音呼鳥、金鶏、あるは林泉に田鶴の放し飼、鴛鴦、水鶏も遠く飛ざるやう自在に育て、これを買ふなり。鸚鵡に言せて來客をもてなさするもおかしきの業なるべし」(巻四「八百屋町飛禽店(やおやまちとりみせ)」)

【参考】キンケイの名称

『日本国語大辞典』では、キンケイの和名として「にしきどり」を挙げる。おそらく、江戸時代は一般にこう呼ばれていたのであろう。一方、『和漢三才図会』巻四二「原禽類」や、小野蘭山『重訂本草綱目啓蒙』巻三二「原禽」では、キンケイの名称(別名)として、「山鶏」「錦鶏」「金鶏」「采鶏」「驚雉」「鷓鴣」など多くの漢名が挙げられているが、いずれにも履軒の「錦雉」は見えない。履軒は事物の名称にこだわりを持ち、自ら新しい命名を試みることもあった(拙稿「中井履軒の名物学―その『左九羅帖』『画觴』を読む」中井履軒『左九羅帖』『画觴』本文・注釈)ともに武田科学振興財団杏雨書屋編『杏雨』一、一、二〇〇八年 所収)を参照されたい。「錦雉」もおそらくは履軒が考え出した名称なのであろう。

\*その他、菅原浩他編『日本鳥名由来辞典』(柏書房、一九九三)にも「錦雉」の名は見えない。



大坂船場の八百屋町筋 飛禽店 (『撰津名所図会』巻四)

書寧靜舎壁示諸子(寧靜舎の壁に書し諸子に示す)

\*寧靜舎は懷徳堂の学寮の名。これは、竹山が一年間京都の西岡に行き、履軒が校務を執った時の作と言われている(加地伸行編『中井竹山・中井履軒』一九二頁)。

盈々白露下 盈々たる白露の下

啾々冷風来 啾々として冷風来たる。

沈々天色浄 沈々として天色浄く

草木凄其衰 草木凄として其れ衰う。

風光如逝川 風光は逝く川の如く

情愕更若疑 情愕として更に疑う若し。

諸君何為哉 諸君何為れぞ

負笈茲相隨 笈を負いて茲に相隨う。

既無塵慮雜 既に塵慮の雜す無く

又絶室家累 又た室家の累いを絶つ。

如今不努力 如今努力せずんば

悠悠待何時 悠悠何時を待たん。

水流不可挽 水流れば挽くべからず

時去不可追 時去れば追うべからず。

青年能幾日 青年能く幾日ぞ

白頭徒懷愧 白頭徒らに懷愧す。

太息長太息 太息し長く太息す

為之者誰居 之を為すは誰ぞや。

酣歌聖所戒 酣と歌と聖戒むる所

玩好傲喪志 玩好喪志を傲む。

況敢弗顧獲 況んや敢えて獲を顧みざるをや

豈遑提爾耳 豈に爾が耳を提ぐるに遑あらんや。

勸君青燈下 君に勸む青燈の下

他事母歴思 他事歴思すること母かれ。

言言爾藥石 言言爾が藥石

語語爾老師 語語爾が老師。

降心其玩索 心を降し其れ玩索し

強聒靡用為 強聒用て為すこと靡かれ。

【注】○提爾耳…「提耳」は懇ろに諭し教えること。『詩經』「大雅」「抑」に見える。○強聒…かまびすしいこと。学舎の名(寧靜)通り、静かにしろというのだろう。

【訳】満ち満ちた白露の下、ヒューヒューと冷たい風が吹く。天は澄み渡り、草木は萎む。時間は流れ行く川のように、(その早さに)驚き、「本当かと」疑うほどだ。諸君は何のために、書箱を負って(はるばる遠く)ここに集まったのか。すでに雑事に心乱されることもなく、また家庭の煩いもない。今、努力しなければ、ぐずぐず

と何時を待つのか。水は流れると引き戻すことができな  
い。時は去ると追いかけることができない。若い時はど  
れほどあるだろう、白髪になっていたずらに後悔する。  
ため息をつきまたため息をつく。そうなるのは誰か。飲  
酒と歌とは聖人が戒めるところだ。「また」器物をもて  
あそんで精神を乱すこと（玩物喪志）を戒める。まして、  
規則（学則か）を顧みないことは、どうして、懇ろに教  
え諭す暇があるうか。君たちに勧める。灯りの下、他の  
ことは妄りに考えるな。すべての言葉は君たちの葉だ。  
すべての語が君たちの先生だ。謙虚に熟読熟考し、声高  
に説くことなかれ。

甲申歳晚自叙

\*甲申は明和元年（一七六四）。歳末に自らの思いを吐露した詩。

歳晏人事休 歳晏 人事休み  
対酒聊自叙 酒に對して聊か自ら叙ぶ。  
軒冕非吾事 軒冕は吾が事にあらず  
琴書性所娛 琴書は性 娛しむ所なり。  
且欣無知己 且つ知己無きを欣び  
囂々守窮廬 囂々として窮廬を守る。  
八絃入胸襟 八絃 胸襟に入り

俛仰得我所 俛仰に我が所を得。  
刺字久已漫 刺字 久しく已に漫れ  
簡牘不出戸 簡牘 戸を出でず。  
豈乏縫腋士 豈に縫腋の士に乏しからんや  
志尚異所趨 志尚 趨く所を異にす。  
退蔵日加慎 退蔵し 日々慎を加え  
避名若蝮蛇 名を避くること 蝮蛇の若し。  
问我笑為然 我に問う、笑ふぞ然りと為す  
請看蕩々者 看るを請う 蕩々たる者を。  
祇怕浮名伝 祇だ 怕る、浮名の伝わり  
偶在指頭伍 偶々 指頭の伍に在るを。

【注】○軒冕：高官のこと。○囂々：自得の様。○俛仰  
：伏したり仰いだり。日常の起居動作を言う。○刺字：  
「刺字漫滅」で、久しく人付き合いをしないために名刺  
の字が読めなくなること。○縫腋：上官の衣。○蕩々：  
『論語』述而篇に「君子坦蕩々、小人長戚々」とある。  
【訳】年の暮れ、仕事を終え、酒に向かつていささか自  
分のことを述べる。宮仕えは私の仕事ではなく、琴と書  
物が好むところだ。かつ、知己のいないのを喜び、平  
然とみすばらしい庵を守っている。宇宙を我が物とし、

起居に我が所を得たりとする。名刺も(使わないため)字が読めなくなり、手紙のやり取りもない。どうして地位の高い人がいないであろうか。「ただ」目指すところが違うだけだ。引退して日々謹慎し、名が知れることを蛇蝎の如く避ける。私に尋ねる、どうしてそうなのだ、と。見てください、あのゆつたりした人を。「彼らは」ただ名前が空しく伝わって、五本の指に入る(有名になる)ことだけを怖れているのだ。

孝思詩三首

\*稲垣子華の孝養を称えた詩、子華(一七二三〜一七九七)は、美作出身の懷徳堂門人。安志藩に仕えたが、親の介護のために仕事を辞し、宝暦十三年(一七六四)に孝子として幕府から褒賞を受けた。この作品はその時の作。『履軒古風』巻三に、子華を詠い本人に贈った「招隠土」(贈稲垣子華)と「席上贈稲垣子華」が見える(帰坂(一七六七年)後すぐ、履軒三六歳、子華四四歳の作)。なお、「招隠土」は『楚辞』に同名の賦がある。

克孝維人 克く孝たり 維この人  
百行攸基 百行基づく 攸  
維伊稻生 維だ伊れ 稻生  
洵是孝思 洵に是れ 孝思

童卅離郷 童卅にして郷を離れ  
裹粮尋師 粮を裹みて師を尋ぬ  
我考是師 我が考は是れ師たりて  
誘うに孝弟を以てす。  
服膺弗爽 服膺して爽わず  
学優而仕 学優れて仕う。  
資事公卿 公卿に資事し  
順徳は比しむ攸なり。  
親老いて養なう無く  
逸かに其の思いを勞す。  
愾焉として永歎す  
盍ぞ歸りて来たらざる、と。  
云に旋り云に帰るも  
薄田二頃のみ。  
彼の耒耜を執り  
茲の黍梁を莠う。  
稲梁生じ  
秀根盛んなり。  
蓬髮鶉衣にして  
經を帯びて耨く。  
既に饑えて且つ渴くも

童卅離郷 童卅にして郷を離れ  
裹粮尋師 粮を裹みて師を尋ぬ  
我考是師 我が考は是れ師たりて  
誘うに孝弟を以てす。  
服膺弗爽 服膺して爽わず  
学優而仕 学優れて仕う。  
資事公卿 公卿に資事し  
順徳は比しむ攸なり。  
親老いて養なう無く  
逸かに其の思いを勞す。  
愾焉として永歎す  
盍ぞ歸りて来たらざる、と。  
云に旋り云に帰るも  
薄田二頃のみ。  
彼の耒耜を執り  
茲の黍梁を莠う。  
稲梁生じ  
秀根盛んなり。  
蓬髮鶉衣にして  
經を帯びて耨く。  
既に饑えて且つ渴くも



子職靡墮 子の職墮すること靡し。  
 上堂奉親 堂に上り親に奉ずるは  
 維魚暨脯 維だ魚暨び脯なり。  
 酒醴是承 酒醴は承くるは  
 維子暨婦 維だ子暨び婦なり。  
 左之右之 之に左し之に右し  
 嬉々其娛 嬉々として其れ娛しむ。  
 眉寿永年 眉寿は永年  
 靡知憂虞 憂虞を知る靡し。  
 厥徳升聞 厥の徳升り聞こえ  
 旌典是膺 旌典を是れ膺く。  
 大君有命 大君命有り  
 錫爾十朋 爾に十朋を錫う。  
 俾爾終養 爾をして養うを終うるまで  
 無不充矣 充てざる無からしむ、と。  
 友朋咸喜 友朋咸な喜び  
 如躬受賜 躬ら賜を受くるが如し。  
 幽人積徳 幽人積徳  
 式作此詩 式て此の詩を作り、  
 遙貽稻生 遙かに稻生に貽り  
 称颺其美 其の美を称颺し、

以伝四方 以て四方に伝え  
 俾民興起 民をして興起せしむ。  
 我聞古訓 我古訓を聞く  
 孝子不匱\* 孝子匱しからず、と。  
 (稻垣子華、名隆秀、美作人。)

【校勘】○黍…「稻」の上に「黍」と書く。

【注】○莠稂：ユウロウ。雑草。「詩経」「小雅」「大田」に「不莠不稂」とある。○酒醴：醴は甘酒。○眉寿：老人のこと。「詩経」「豳風」「七月」に見える。○孝子不匱：「詩経」「大雅」「生民之什」「既醉」に「孝子不匱、永錫爾類」(孝子匱しからず、永く爾の類を錫う)とある。ちなみに、履軒は豊後の孝女はつを称える文章を「錫類記」と名づけている。

【訳】すばらしく孝行である、この人は。「孝は」百行の基礎である。

ただ、この稻垣生が、本当に孝行で親思いである。幼くして故郷を離れ、糧を包んで師を尋ねた。私の父がその師であり、孝悌の道で誘った。

慎んで心に銘記し違うことなく、学問は優秀で宮仕えした。公卿を助け仕え、徳に親しんだ。

親が老いて養う者もなく、遥かに思いを馳せた。

長くため息をついて思った、どうして帰らないでおられないのか、と

そこで帰ったが、痩せた田が二頃（\*一頃は百畝）あるのみ。

鋤を執って穀物を植える。

稲穂が生じても、雑草が生い茂る。

ぼさぼさ髪に粗末な服で、経書を片手に田を耕す。

飲食に不自由しても、子としての務めは怠らない。

座敷に上がって親に奉じるのは、ただ魚と干し肉だけだ。

酒や甘酒を承けるのは、ただ子供と婦人だけだ（自分は口にしない）。

親の側に仕え、嬉々として楽しんでいた。ませていた？

ご老人はずっと憂いというものを知らなかった。

その徳がお上に届き、表彰を受けた。

主君より命があった。お前に報奨金を賜う、

お前が孝を全うするのに必要なものはすべて与える、と

のことであった。

友らは皆、自分が表彰されたかのように喜んだ。

世捨て人の私、積徳が、この詩を作り、

はるかに稲垣生に贈り、その美德を賞揚し、

世の中に伝え、人民が感動し奮起するようにした。

古の言い伝えに言う、孝子は乏しくない、と。

（稲垣子華は、名は隆秀、美作の人である。）

### 【参考】

懷徳堂の孝子顕彰運動については、西村天囚著『懷徳

堂考』下巻「好善の家風」（一九一一年）、加地伸行編『中

井竹山・中井履軒』（明徳出版社〈叢書・日本の思想家

二四〉、一九八〇年）第二章第五節「孝子顕彰運動」（小

堀一正執筆）に見える。

なお、稲垣子華墓碑は、今も岡山県美作町田殿に存在

する（『懷徳堂センター報』二〇〇五口絵参照）。竹山の

子蕉園作の墓碑は以下のようなものである。

稲垣子華碑銘

寛政九年丁巳春正月六日、瀧崑先生稲垣子華諱隆秀卒于播、其弟

子在作者三十餘人、相會而哭、乃相議曰、「剖析周密以訓誥章句鳴

焉者世或有之。高逸妍麗以辭賦文章鳴焉者亦或有之。矯揉自修僅

得一節之長者寔蕃有徒。夫温厚恭儉、博學篤行、能風化邦國、如

吾夫子粹而全者未之有也。吾夫子之德大矣哉。今也夫子捐我諸子、我諸子將安放\*。蓋碑于其故邑、擇諱夫子之惠行而文焉者而銘之、我諸子歲時拜薦有所適、後世子孫景慕者有所仰、不亦善乎。」乃使三宅生來請于余曰、「竹山先生向有孝狀之撰\*、吾師之行事、於是乎詳矣。不可重煩先生。請子銘之。」余與生語、問之以其侍疾助葬之狀、則對辭愿款\*、目潤色戚、追慕之誠、可掬也。則可以知其徒咸然也。亦可以想其後世子孫咸然也。夫子之遺愛何其深也。昔蔡邕爲郭太碑文、謂其友曰、「吾爲碑文多矣、皆有慚德、唯郭有道無愧色耳。」余於斯銘亦然。銘曰、

嗚呼夫子、何德之純。孝友其素、飾之以文。清約其守、能惠于人。學之斯優、内彼玄纁\*。有赫之都、肉粟之郡。侯氏乃喜、台得蓋田\*。士庶宵慶、戎有良翰\*。父兮土思、不肯徙遷。夫子曰噫、曷以官爲。言告侯氏、言告言歸。

厥養維何、其體其志。厥業維何、其耒其耜。扇枕臥冰\*、豈足專美\*。炎畦霜疇、胼胝其支\*。出酸處辛、其色有怡。父兮安此、逸豫無期\*。孝弟力田、邦家之本。王侯爲光、紛舉旌典。三命之俯\*、德音孔膠。彼其不蹟、胥則效矣。隣保之訛、覃及邦陲。愛之愛之、愛莫助之\*。日月已愒、孝潰于成。載稟載書、輻其名聲。侯曰於戲、既畢爾志。勉爾遁思\*、誨台赤子。

夫子曰噫、我事全矣。

旧恩亦渥、豈有遐心\*。乃眷東顧、往即前職。所居風草、民莫不穀\*。

嗚呼夫子、何德之純。

濟濟多士\*、莫之與倫。維時丁巳、何歲之厲。天不慙遺\*、俾民亡師。

鄉人質買、如喪家狗\*。

仰歎俯泣、銜恤相誦\*。我之無辜、夫子之故。拊我育我、我之父母。

再駕于播、俾我心苦。

尚曰旋歸、豈遐棄我。噫今若斯、云何其眚\*。蒼天有命、斯謂之何。

乃石乃文、于彼田殿。

以酌以羞\*、歲時不倦。豈敢爲報、薄以慰心。視死之日、猶生之年\*。

嗚呼夫子、何德之純。

唯其純矣、是以有然。

大阪 中井曾弘撰并書

【解説】碑銘の作者は、中井曾弘、号蕉園（一七六七～一八〇三）。中井竹山の子。詩才に恵まれ、一晚で十篇の賦を書き上げた「一宵十賦」を残している。将来を期待されたが、三十六歳の若さで亡くなった。「子華碑銘」は、三十歳の時の作（寛政九年は一七九七年）。蕉園の詩文を集めた「墳集」にも見える。序と銘からなり、銘は、経書に典書を持つ四字句を連ねた荘重な文章である（注参照）。

【訳】

寛政九年（一七九七）の正月六日に瀧嶺先生稲垣子華、本名隆秀は播磨で亡くなった。美作に在る弟子三十人ほどは、集まって慟哭し、相談して言った。

「分析が緻密な儒教經典の注釈で世の中に知られた人はいるだろう。また、非凡で美麗な辞賦文章で知られた人もいるだろう。自制心を持ち勉学に励み一芸に優れる人は非常に多い。ただ、温厚で慎ましく、博学で篤行家で、国を感化することができるのが、我が師ほど純粹かつ完全な人は、いまだかつていなかった。我が師の徳はなんと偉大なことか。今、師は我々諸子をお捨てになつた。我々はこれから何によつたらよいのか。その故郷に碑を建て、師の徳行を覚えてゐる者を選び、文章を作り銘に彫ればいいではないか。そうすれば、我々諸子は季節ごとの墓参に行く所ができるし、後世の子孫で敬慕する者も拜む所ができる。これはよいことではないか」と。

そこで三宅生を私の処に遣わして言った。「先に竹山先生に孝状をお書き頂き、我が師のこれまでの行いは、明らかにいたしました。再度先生を煩わせるわけにもまいりません。あなた様に銘を書いていただけませんか」と。私は生と語り、看病や葬儀の助けた様子を尋ねた。答えは慎ましかで、涙を浮かべ沈痛な表情であり、真心から師を追慕していることがよくわかった。よつて、その弟子は皆そのようであることがわかるし、また、後世の子孫

も皆そうであろうと予測できる。師の遺愛は何と深いことか。昔、蔡邕が郭太の碑文を作りその友人に、「私は碑文をたくさん書いたが、皆徳に不完全なところがあつた。ただ郭有道だけは完璧であつた」と言った。私がこの銘においてもその通りだ。銘に言う。

ああ師よ、何と純粹な徳をお持ちだったことか。  
生まれながらに〔素地として〕孝徳を備え、〔加えて〕文才も持ちつであつた。

謙虚で慎ましかで、人には恵み深く、  
学問は優れ、徳を蔵し、  
都に名を馳せ、郡に招聘され、

国に忠臣が得られたと、領主はお喜びになり、  
いい人が得られたと、武士や役人は喜んだ。

父上は土地にこだわらず、引つ越しを承知なさらず、  
迎えて養うことを拒まれ、帰つて養うよう引かれた。

師は「ああ、どうして宮仕えしておられようか」とおっしゃい、  
そこで領主に告げてお帰りになつた。

注（宝暦四年（一七五四））

〔父上の〕お体とお心をお養いなさる、  
畑仕事を生業とされた。

師のすばらしさは孝行だけではない。  
炎暑厳寒の畑仕事で、手足はあかぎれだらけ。

〔でも〕いくら辛い思いをしても、微笑んでおられる。

父上はすっかりご安心なされ、心安らかに過ごされた。孝行で友人にも親切で農業に勉めるのは、国の礎。將軍様とご領主とは誇りとされ、表彰された。

注(明和元年(一七六四))

位が進んでもますます謙虚に、評判は揺るぎなきものとなった。

そのすばらしき行いを、役人は見習い、

村を感化し、さらに国の隅々にまで及んだ。

だが、いくらお慕い申し上げても事態をどうすることもできなかった。

歳月が経ち、孝行を遂げ(父上が亡くなり)、

琴を弾き、書を読み、名声を隠しひっそりと住まわれた。

ご領主がおっしゃった。「志を遂げられた(孝を全うされた)今、

ひっそりと暮らし、子弟の教育でもなさい」と。

師がおっしゃった。「私の仕事は全うしました。」

厚くご恩を被っておりますのに、どうしてお忘れできませんか」と。

そこで、東に赴き、前職にお就きになった。

その地の民草は悪い者がいなくなった。

ああ師よ、何と徳の純粹なことか。

並みいる名士の中にも、これほどの人はいない。

ただ、丁巳という年は、何とひどい年なのだ。

天は強いて(師を)お残しになられず、民から師を奪われた。

里人は意気消沈し、家を失った犬のように。

仰いで嘆き伏して泣き、悲しみを抱いて互いに嘆き合った。

私が罪がない(正しくいられた)のは、師のおかげだ。私を撫で育ててくださった、私の父母だ。

再び播磨へと赴かれ、私を悲しませた。

すぐに帰ってくるとおっしゃったのに、どうして遠く私をお棄てになったのか。

ああ、今このようになり、何を望めようか。

天には命があり、これをどうしようもない。

そこで、田殿に石碑を建て文を作り、

歳時怠らず酒と食物をお供え申し上げ、

報いとするには足りないが、せめて自らの慰めとする。

死を見ること、生のごとく「少しも恐れず」、

ああ、師よ。どうして徳がかくも純粹なのか。

ただ、純粹なゆえに純粹なのだ。

【注】○瀧崑…「崑」は「嶽(岳)」の異体字。故郷の田殿の清滝に因んでつけられた号。○三十餘人…碑の下部に名前が彫られている。「墳集」では「若干人」になっている。○寔蕃有徒…(「左伝」昭公二十八年「寔蕃有徒」、『書経』仲虺之誥「寔蕃有徒」。○放…「よる」(『論語』里仁篇「放乎利而行多怨」。○竹山・孝状之撰…中井竹山に「稲垣子華孝状」(明和二年(一七六五)作)がある。○愿款…「ゲンカン」。慎み深くて誠があること。○蔡崑爲郭太碑文…(『後漢書』郭太伝、「高士伝」。○郭有道…「有道」は举士

科目の一つ。○玄纁：「ゲンクワン」。黒い帛。人を招聘する際に用いるもの。ここでは、それに価する価値を言うか。○肉粟：食料。給料? (白居易「白氏長慶集」巻六五「七十三養老、在使之寿富貴」に「特頒其布帛肉粟之賜則謂養老之道尽於是矣」とあるのを参照。)  
 ○台得蓋臣：「蓋臣(ジンシン)」は「忠臣」(『詩経』大雅、文王)。  
 ○戎有良翰：「戎」は「なんじ」。「良翰」は才能のある人(『詩経』大雅、崧高)。  
 ○言告侯氏、言告言歸：「言」は「ここに」(語調を整える語、『詩経』によく見える)(『詩経』国風、周南、葛覃「言告師氏、言告言歸」)。  
 ○扇枕臥水：「扇枕」は暑い夏に親の枕を扇いで涼しくすること。「臥水」は王祥という人が、冬に親の好きな鯉を獲るため、臥して氷を解かしたこと(『捜神記』)。ともに、孝行を言う。  
 ○專美：美名を独占する(『書経』説命下、「書言故事」評論類、專美)。  
 ○胼胝：「ヘンチ」。あかぎれ。手のものを「胼」、足のものを「胝」という。  
 ○逸豫無期：十分に楽しむこと(『詩経』小雅、白駒)。  
 ○三命之俯：官位が進むに随つて益々謙遜すること(『左伝』昭公七年)。  
 ○德音：良い評判(『詩経』国風、狼跋、邶風、日月)。  
 ○覃及：「タンキユウ」。及ぶこと(『詩経』大雅、蕩)。  
 ○愛莫助之：(『詩経』大雅、蒸民)。  
 ○日月已怙：「怙(トウ)」は「過ぎる」(『詩経』唐風、蟋蟀「日月其怙」)。  
 ○載榮載書：「載」は「すなわち」(語調を整える語、『詩経』によく見える)。「榮」は「琴」。弹琴と読書。ともに風流なもの。  
 ○勉爾遁思：「遁思」は世を通れる意思(『詩経』小雅、白駒)。  
 ○遐心：「遐」は「遠く」。

「遐心」は疎遠にする心(『詩経』小雅、白駒)。  
 ○不穀：「穀」は「善」。  
 ○濟濟多士：(『詩経』大雅、文王)。  
 ○愍遺：「ギンイ」。強いて残す(『詩経』小雅、十月之交「不愍遺」)。  
 ○喪家狗：家を失った犬(『史記』孔子世家)。  
 ○銜恤相訓：「銜恤」は「悲しみを抱く」(『詩経』小雅、蓼莪)。「訓(シュウ)」は「呪う」。  
 ○遐棄：遠く見捨てる。生者を後に残して人が死ぬこと(『詩経』周南、汝墳)。  
 ○云何其盱：「盱」は「望む」(『詩経』小雅、何人斯「云何其盱」)。  
 ○羞：食物をすすめ供える。  
 ○薄：いささか。  
 ○視死之日、猶生之年：「史記」蔡沢伝に「視死如帰、生而辱不如死而榮、士固有殺身以成名、唯義之所在、雖死無所恨」とあるのを参照。

西岡雑詩

\*西岡での静かな滞在を詠った詩。京都の西岡は、竹山や履軒の妻の実家の革嶋家の所在地。竹山は、明和元年(一七六四)、革嶋家の家事を整理するため、一年間西岡に滞在し、『西岡集』という漢詩文集を残している。

環舍千畝竹 舍を環る千畝の竹  
 翠光撼几席 翠光几席を撼かす。  
 幽斎一炷香 幽斎一炷の香  
 中有独眠客 中に独り眠る客有り。

其二

暮烟籠竹樹  
蛙鳴水声外  
露牀夢亦幽  
不復還城市

暮烟樹に籠め  
蛙は鳴く 水声の外。  
露牀 夢亦た幽  
復た城市に還らず

其三

玉女宵翱翔  
遺却玳瑁簪  
朝來行人得  
尚帶雲髻沈

玉女宵に翱翔し  
玳瑁の簪を遺却す。  
朝來たりて 行人得れば  
尚お雲髻を帯びて沈む。

其四

襤褸戮龍兒  
龍兒鼎中泣  
祇為貞節軟  
甘心慘禍及

襤褸を褫きて 龍兒を戮せば  
龍兒鼎中に泣く。  
祇だ貞節軟きが為に  
慘禍及ぶに甘心す。

其五

竹芽烹初熟  
村醪沽未還  
先生興不舒

竹芽烹えて 初めて熟すも  
村醪 沽いて未だ還らず。  
先生 興舒せず

先齧兩三環

先に兩三環を齧む。

其六

為客在竹鄉  
日々林中行  
林中斜々逕  
唯有薰風清

客と為りて 竹郷に在り  
日々 林中を行く。  
林中 斜々の逕  
唯だ薰風の清らなる有り。

其七

為客在竹鄉  
日々林中行  
翠光透肌骨  
冷然染衣裳

客と為りて 竹郷に在り  
日々 林中を行く。  
翠光 肌骨を透り  
冷然として 衣裳を染む。

其八

為客在竹鄉  
日々林中行  
興來一長嘯  
上有憂玉声

客と為りて 竹郷に在り  
日々 林中を行く。  
興來たりて 一たび長嘯すれば  
上に玉を憂らす声有り。

其九

為客在竹鄉

客と為りて 竹郷に在り

饗殮きやうらん憑よ此君このきみ\*

饗殮きやうらん 此君このきみに憑よる。

久違ひさびさ腥膻せいせん氣き

久ひさしく腥膻せいせんの氣きから違さり

清瘦せいしゆ絶た俗塵よくじん

清瘦せいしゆ 俗塵よくじんを絶たつ。

【注】○龍兒りゆうご：龍雛りゆうすうでタケノコのこと。○饗殮きやうらん：饗きやうは朝食。  
殮らんは夕食。前出の「食板銘」を参照されたい。○此君このきみ：  
竹の異名。晋の王徽之が竹を指して「何可一日無此君このきみ（何  
ぞ一日も此君無かるべけん）」と言つた故事に基づく。

【訳】

家を廻る広大な竹林、その翠みどりの光が机や席をうごめかす。  
ひっそりとした書齋に一筋の香、その中に一人眠る客が  
いる。

(その二)

暮れの烟が竹林に立ち籠め、蛙は水の音の外に鳴く。

帳はじりのない寢床で夢心地に幽玄を巡り、街中の喧噪を忘れ  
去る。

(その三)

天女が宵に舞い降りて（さまよつて）、玳瑁たまいまいの簪かんざしを忘れ  
ていった。

朝が来て通りがかりの人が見つけると、まだ雲のような  
もとどりの形跡を残していた（玳瑁たまいまいの簪かんざしとは、茶色の皮

を被つた竹の子か。それを朝だれかが掘つてきてくれた、  
そこにはまだ黒々と土がついている、か。沈は泥、雲髻  
は天女の黒々とした豊かな髪かみ。黒々と纏わりついている  
土の様子か？)

(その四)

皮を剥いで龍の子（タケノコ）を殺すと、龍の子は、鍋  
の中で泣く。

ただ貞節ていせつが不十分なために、このような惨禍さんごの憂うれき目に  
あつたのだ。

(その五)

筍たけのこが煮えて火が通つたが、村の濁り酒にごり酒を買いに行つた者  
はまだ戻らない。

先生せんせいは待ちきれずに、先にちよつとつまみ食い。

(その六)

竹の郷さとで客きやくとなり、日々林はやしの中を歩く。

林はやしの中の小径せうけいは斜かためで、ただ清らかな風が吹く。

(その七)

竹の郷さとで客きやくとなり、日々林はやしの中を歩く。

翠みどりの光ひかりは肌みにまで透みき通り、冷ひやややかに衣裳いさうを染める。

(その八)

竹の郷さとで客きやくとなり、日々林はやしの中を歩く。

興きように乗じて一節いちせつぶつと、上で玉たまを鳴ならすような声こゑがする。



(その九)

竹の郷で客となり、毎食、この君(竹)に頼る。

久しく生臭物から遠ざかり、清らかに痩せて、俗塵を断つ。

送君舜之関東(君舜の関東に之くを送る)

\*竹山の門人である中村君舜(一七四〇〜一七八二)の送別詩。

君舜は履軒の後妻(安永八年(一七七九)再婚)の兄。名は有則。

号は出身地の平野郷から見える二上山に因み両峯と言う。明和

三年(一七六六)の履軒京都行の際、同時に白木屋に仕えに行つ

たこともある。『履軒古風』卷三にも「春夜小集似君舜」と題す

る詩が、卷四に「清虚館小集呈君舜」と題する詩がある。この

詩の関東行はおそらく明和二年(一七六五)。竹山『笈陰集(詩

集)』卷二に、明和二、三年(一七六五、六)の作だと思われる

「君夷告別之江都、聞先到京師留宿子甚家、辨行事而後発、故追

寄此」という詩がある(影印本三〇〇頁)。『笈陰集(文集)』卷

四には、明和三年(一七六六)作の「送中村君舜之江都序」が

ある。

臨別問帰期 別れに臨みて 帰期を問う

帰期不可久 帰期 久しかるべからずと。

君言跋涉艱 君は言う、跋涉艱く

且避煩熱時 且く煩熱の時を避けん、と。

東土多士叢

英華繽紛紛

況君芝蘭姿

翩躚往其間

相得且歎晚

牽衣投君轄\*

離別原太苦

新交更難割

偏恐三秋天

空見鴻雁來

所賴在感情

氣象日推移

蓴鱸\*此地多

秋風入君懷

去々千里羈

霧露\*慎興寢

分手意黙々

相顧更一言

東土雖樂矣

海上有故人

東土士叢多

英華繽紛紛

況んや君が芝蘭の姿

翩躚して 其の間に往くをや。

相い得て 且つ晩きを歎き

衣を牽きて 君が轄を投ぐ。

離別 原より太だ苦しけれども

新交 更に割き難し。

偏えに恐る 三秋の天

空しく鴻雁の來たるを見るを。

頼る所は 感情に在るも

氣象 日々推移す。

蓴鱸 此の地多く

秋風 君が懐に入る。

去々 千里の羈よ

霧露 興寢に慎め。

手を分かつに 意黙々たり

相い顧みて 更に一言す。

東土 樂しと雖も

海上 故人有りと。

【注】○投君轄…投轄は、車のくさびを井戸の中に投ず

る意。客を愛して強いて帰れなくすること。○蓴鱸：蓴羹鱸膾の略。ジュンサイの羹とスズキの膾。晋の張翰はこの二つの故郷の名産を味わおうと官を辞して帰郷した(『晋書』文苑伝、張翰伝)。後、故郷を思う情を言う。  
○霧露：病気のこと。

【訳】

別れに臨んで帰る時期を尋ねる、遅くなつてはいけな  
よと。

〔すると〕君は言う、山を越え川を渡るのは大変ですよ、  
当分は暑い時期を避けます、と。

関東は名士が多く集まつており、花が咲き誇っている。  
まして君の芳しい姿が、その中で軽やかに飛び回ればど  
うであろう。

知り合いになるのが遅かったと嘆き、君の衣を引いて留  
めるであらう。

別れはもとより苦しいものだが、新しい交わりはさらに  
そうだ

〔以上のようなことから〕私が心配するのは、秋になって、  
雁だけ帰ってくる(君は帰ってこない)ことだ。

頼りとするのは感情だけだが、それも日々移り変わる。  
おいしいものはこの地に多く、秋風が君の懐に入れば思

い出さだろう(？)

行け、千里の旅人よ。起き伏しに病気には気をつけよ。  
別れに際して、気持ちには晴れないが、振り返つて一言だ  
け付け足す。

関東が楽しくても、大阪に友人がいることを忘れるな  
よ、と。

臥龍贊

\*在野にありながら才能を有していた諸葛亮を賛美する詩。

瓊玉為質、蕙蘭為衣、布衣之賢、王佐之才。三代之下、  
吾見若人、偉矣哉。所以臥草廬而龍名、駕輕軒而虎威、  
翼微君於泥中、峙鼎足于西陲、粲然王政、永觀遺愛。斯  
人而寿、事未可量知矣。非天下之奇才、其孰能之。嗟夫  
抑時言之、公之業可謂大成也。而公之志則弗遂、命矣哉。  
即以不能混一寰宇而疾公者、曾不說史矣。

【注】○蕙蘭：香草。香草で人を称えるのは『楚辞』な  
どによく見える。○龍名：諸葛亮が臥龍と呼ばれたこと  
を指す。

【書き下し文】瓊玉を質と為し、蕙蘭を衣と為し、布衣

の賢にして、王佐の才あり。三代の下、吾若の人を見るに、偉きかな。所以に草廬に臥して龍の名あり、輕軒に駕して虎の威あり、微君を泥中に翼け、鼎足を西陲に峙して、王政を粲然たらしめ、永く遺愛を觀す。斯の人にして寿ければ、事未だ量り知るべからず。天下の奇才に非ざれば、其れ孰か之を能くせん。嗟夫れ時に抛りて之を言えは、公の業大成と謂うべきなり。而して公の志は則ち遂げざるは、命なるかな。即し寰宇を混一する能わざるを以て公を疚む者あれば、曾て史を讀まざるなり。

【訳】 寶石のような性質を持ち、香草を衣服にし、平民の賢人にして、王を輔ける才能があつた。夏殷周の三代以降では、この人を見るに、実に偉大であると言える。そこで、草の庵に住んで臥龍と呼ばれ、軽い車を操つて猛虎の威力があり、危うい主君を泥の中から救い、西のはしに三国を鼎立せしめ、王政を輝かせ、長く遺愛を示した。もしこの人が長寿を全うしたら、事態はどのようになつていたか計り知れない。天下の奇才でなければどうしてこのようなことができたであろうか。ああ、当時の状況を考えれば、公の業績は偉大だと言ふべきである。だが公の志が遂げられなかつたのは、運命だ。もし、天

下を統一できなかつたことで公を責める人がいるとすれば、「その人は」歴史を讀んだことがない人である。

### 通天橋霜樹

\*京都の東福寺の紅葉を詠う（口絵3参照）。

彩霞染衣澗辺	彩霞 衣を染む澗の辺
明錦満目崖上	明錦 目に満つ崖の上。
青樽欲開何処	青樽 何処に開かんと欲して
躊躇魚炙熊掌*	躊躇す 魚炙と熊掌と。

【注】 ○通天橋：通天橋は京都の東福寺にある橋廊。紅葉の名所として今も有名。○青樽：清樽。清酒を入れた樽。○魚炙熊掌：焼き魚と熊の掌。美味の代表。『孟子』告子上篇に、生命と道義の両方を取ることはできないことを言う譬えとして、「魚我所欲也、熊掌亦我所欲也。二者不可得兼。舍魚而取熊掌者也。生亦我所欲也。義亦我所欲也。二者不可得兼。舍生而取義者也」と見える。

【訳】 谷川のほとりで艶やかな霞が衣を染め、崖の上ではまばゆい錦が目一杯に広がる。酒樽をどこで開けようかと考え、酒の肴を何にしようかと悩む。

## 巻二

巻二は、三十五歳の時の京都行に関する作品を収めており、基本的に『洛汭奚囊』と重なる。その全文の翻刻、訳注は拙稿「『洛汭奚囊』—中井履軒の京都行」(『懷徳堂センター報』二〇〇四)において紹介した。同稿において、『洛汭奚囊』と『履軒古風』巻二との異同を以下のように述べた。

・『洛汭奚囊』になく『履軒古風』巻二にあるもの…「離恨」「読王祥伝」

・『洛汭奚囊』にあつて『履軒古風』巻二にないもの…「離席、奉答伯兄」「既上舟、奉寄伯兄(三首)」「雪朝奉呈菅公」「丁亥早春自帰省浪華至、題所携梅花、上菅公」「碧山樓陪菅公賦奉酬」「遊高台寺」「答土管 其二、其三」「九月十三夜」「南帰途中口号 其二(最後の詩)」

・『洛汭奚囊』との文字の異同

\*「永輔義佐寄酒鷄子来、題簡背謝之」↓「早原寄酒鷄子来、題簡背謝之」

\*「述客中況、答早土管」「憶旧遊寄早土管」の「早」なし。

\*「川上習之」の「川上」なし。

以下、『洛汭奚囊』にない二作のうち、上記拙稿で紹介しなかった「読王祥伝」を紹介する(九七頁)。また、「はじめに」で述べたように、履軒の草稿であると思われる新田文庫『履軒古風』(E138)との異同を述べたい。履軒の創作過程がよくわかるからである。また、上記拙稿における誤植も、お詫びし訂正したい。

### 【誤植】

五一頁上段一〇行目、下段二行目、一四行目、

五二頁上段一二行目

『寔陰集(詩集)』巻三↓『寔陰集(詩集)』巻二

五二頁 四、「到京、奉寄伯兄」詩(其二)

我身↓吾身〔書き下し〕我が身↓吾が身

五六頁 一〇、「羈鳥辞」

以和↓以相和〔書き下し〕以て和す↓以て相和す

五七頁 一二、「偶成」

簡篇↓簡編〔書き下し〕同上

六四頁 二〇、「鴨林納涼」

溪流↓溪水〔書き下し〕同上

〔訳〕川辺の林↓川の水

六七頁 「歎拘」

植表而推秋／毫弗遁兮↓植表而推／秋毫弗遁兮

〔書き下し〕 植表し推秋し／毫も遁うしなわざれば

↓表を植て推し、／秋毫も遁うしなわざれば

六七頁 「歎拘」

有微有悪↓有微有悪

〔書き下し〕 微しき↓嫩よき

〔訳〕 卑しいのも良くないのもあるが

↓良いのもあれば悪いのもあるが

七一頁 「九月十三夜」

不再来↓不再求

〔書き下し〕 再びは来ず↓再びは求めず

【文字の異同】（\*履軒草稿↓『洛内叢書』）

二、

五〇頁 席上↓離席

三、

五一頁 自咲↓自笑

五一頁 休憂阿徳貧、貧時即是福（自無塵繩縛）↓休憂

阿徳貧、自無塵繩縛（\*竹山『奠陰集（詩集）』卷二の引用は「休愁阿徳貧、貧時即是福」）

\*定稿では「心配しないでください。貧乏人の私は、世俗の塵に縛られることはありませんから」の意になろう。一方、見せ消ち前の草稿では、「私が貧乏なことを心配しないでください。貧乏な時が幸せなのですから」の意になろう（「休憂」の係る範囲が変わる）。そして、この草稿は、前の詩の結句「多事從茲始」（厄介なことはこれから始まる）に対応するものと言えよう。つまり、草稿では、これまで貧乏でもついていた履軒が、世の中に出て出世することを暗示するものであるのに対し、定稿では、初めから出世することがないという言い方に変えられているのである。後者は、京都市の後の「答早士誉」に「豈是貧寵栄」（貧乏人がどうして恩寵に浴しよう）と言い、一年後の帰阪時に詠んだ「南帰途中口号」に「一掛京洛塵、未化旧素衣」（一度、京都の塵を払うと、白い衣は元のままで）というのと同様、結果を見てからの視点で書かれている

ることがわかる。履軒も出立時には、出世を意識していたが、後にはそれを隠したと言えるかもしれない。

八、

五三頁 英輔↓永輔

(cf. 『履軒古風』 手稿本では「早原二生」)

五三頁 「牘背」の「牘」の横に「簡」とある↓簡背

五三頁 「遠相贈」とあり「遠」の横に「並」とある

↓並相贈

一〇、

五五頁 「朝飲」とあり「朝」の横に「晨」とある↓朝飲

五五頁 紫霓↓紫電

五五頁 汨揺々↓汨蕩々

十五、

六〇頁 「肱」は「鈎」(?)を改める↓肱曲

十八、

六二頁 「朽靡姿」とあり「姿」の横に「軀」とある

↓朽靡姿

六二頁 驩未洽↓歎未洽

二十一、

六六頁 「中之与晷」とあり「晷」(\*)「晷」は日陰の意を消して「晷」とある(『洛晷奚囊』も同じ)↓中之与晷

二十四、

六九頁 「葱根」とあり横に「蕤花」とある↓蕤花

六九頁 至小者↓至少者

二十五、

七〇頁 忘朝饑↓忘朝餓

二十七、

七一頁 「独鶴」とあり「独」の横に「別」とある

↓別鶴

【ない作品】

八と九の間

研究室銘 代菅公(研究室の銘、菅公に代わる)

玄々の室 玄々の室に

伏彼秋兔 彼の秋兔を伏す

儻遭風雨 儻し風雨に遭えば

化作龍蛇 化して龍蛇と作る

【注】○研究室：硯箱。○玄々：奥深い様。『老子』第一章の「玄之又玄、衆妙之門」が有名。○秋兔：秋の毛は細いと言う。その秋の兔を使った筆を言うか。

【訳】奥深い部屋（\*硯箱）に、あの秋の兔（\*筆）が潜んでいる。

もし、風雨（\*墨汁）に遭うと、化して龍や蛇（\*字）になる。

【参考】硯箱、硯を詠んだ履軒のその他の詩

研究室銘（新田文庫『履軒古風』（E138））

（次の「寄長洲」は辛卯（明八年・一七七二）孟春の作）

我之無能 我れ之れ無能にして

惟其有容 惟だ其れ容るる有り

鈍鋭殊質 鈍鋭質を殊にし

並受待用 並びに待用を受く

狡兔之林 狡兔の林となり

龍蛇之淵 龍蛇の淵となる

【訳】私は能なしで、物を容れることしかできません。優れたものと劣ったものとはもとより性質を異にします

が、それぞれ使われ方があります。すばしい兔（\*筆のこと？）の林となり、龍や蛇（\*字を喩える？）が棲む淵となります。

研銘（『履軒古風』巻四）

窮谷之材 窮谷の材

隱見有期 隱見期有り

爾性已鑿 爾の性已に鑿たれ

爾用方施 爾の用方に施されんとす

【訳】奥深い谷の材が、隠れたり現れたりするのはそれぞれ時期がある。

お前の質はすでに鑿たれて、これから用をなそうとして

十七と十八の間

泉家石地炉銘

彼洛之水 彼の洛の水

有汚其支 汚ぎるあり 其の支

遭運之利 遭運の利

万民攸倚 万民倚る攸

泉家之莊 泉家の莊

在東之涯  
乃祖菟裘  
孫子敬止  
修其壞弊  
獲其玄器  
四周無縫  
廓然虛矣  
無蓋無底  
類井之幹  
先世旧物  
觀斯有感  
就作地炉  
以供烹飪  
以示弗忘  
永貽厥孫  
育齋処士  
孝思攸覃  
属銘其友  
履軒幽人  
時属孟夏  
明和四年

東の涯にて在り  
乃ち祖菟裘  
孫子敬止し  
其の壞弊を修む  
其の玄器を獲り  
四周縫無く  
廓然として虚なり  
蓋無く底無く  
井の幹に類す  
先世の旧物  
斯れを觀て感有り  
就ち地炉を作り  
以て烹飪に供し  
以て忘れざるを示す  
永く厥の孫に貽し  
育齋処士  
孝思 覃 (およぶ? ふかい?)  
銘を其の友  
履軒幽人に属す  
時 孟夏  
明和四年に属す

攸とら

【校勘】○属：「在」を改める。

二十一と二十二の間

離恨(略)：『履軒古風』もあり。

二十七と二十八の間

読王祥\* (王祥伝を読む)：『履軒古風』もあり。

淳徳一代望 淳徳 一代望み

孝友継虞\* 孝友 虞<sup>ぐぜい</sup>を継ぐ

奈何馬食槽 奈何せん 馬食の槽

可惜風吹耳 惜むべし 風の耳を吹くを

揖讓勞文飾 揖讓は 文飾を勞し

榮華没年齒 榮華に 年齒を没す

古人言忠臣 古人言う 忠臣は

須求之孝子 須く之を孝子に求めよ、と

此語徒虚辞 此の語 徒らに虚辞にして

掩卷為君慨 卷を掩いて君が為に慨なげく

【注】○王祥：『晋書』に伝がある。晋の人。冬、母のため鯉を捕ろうとした時、氷が自然に割れて鯉を得たという話がある。二十四孝の一つ。○虞<sup>ぐぜい</sup>：『史記』周紀に、礼を尊んだ土地として登場する。○古人言(以下)：



『戦国策』卷一九「王立周紹為傳」（王周紹を立て傳と為す）に、趙王の言として「人有言子者曰、『父之孝子、君之忠臣』（人子を言う者有りて曰く『父の孝子は、君の忠臣なり』と）とある。この故事に基づく「孝詩」という詩にも「欲得忠臣者、求之孝子門」（忠臣を得んと欲する者は、之を孝子の門に求めよ）とある。

【訳】「王祥の）淳き徳は世の中こそつて仰ぎ、その孝行と友情は虞汭を継承するものであった。

だが、どうしよう、大食らいの桶（のような食器）を。また、惜しむべし、「礼儀など」どこ吹く風という態度を。（?）

礼儀は表面を取り繕い、栄華の中に天寿を全うした。古の人（\*『戦国策』に見える趙王）は「忠臣は孝子に求めよ」と言った。

この語はいたずらに空語となっている。本を閉じて君のために嘆く。

【参考】王祥は、魏に仕えながら、司馬氏の晋に仕え、高官の地位で天寿を全うした。孝行だが、魏には忠臣ではなかった。末尾は、「忠臣は孝子にもとめよ」との格言は、王祥の生涯を見れば、虚言だ、嘆かわしい、と言

うのであろう。孝行という徳行と現世での栄達とは両立しないという履軒の考えを反映するのかもしれない。

帰省浪華飲黒田氏宅、時季秋閨之晦也

（浪華に帰省し黒田氏宅に飲む、時季秋閨の晦なり）

秋尽氣蕭森\* 秋は尽き 氣は蕭森たり

高堂杯盤羅 高堂に 杯盤羅なる

歛極生愁思 歛極まりて 愁思生じ

不謂三句多 三句も多しと謂わす

【注】○蕭森…物寂しい様。

【訳】秋は終わり、物寂しさが広がる。お屋敷には杯や皿が敷き並べられている。

歛楽が極まって愁いが生じ、三十日も多いと思わない（閨の月がいつもより早く尽きて帰らなければならぬことを歎くか?）。

同前 醉中揮筆（醉中に筆を揮う）

揮筆走龍蛇 筆を揮いて龍蛇を走らせ

吾復何所讓 吾れ復た何をか讓る所ならんや。

醉墨題醉語 醉墨にて醉語を題し

因酔見吾狂 酔に因りて吾が狂を見す。

発散させたか。

【訳】筆を揮つて龍や蛇のような字を走らせ、私はもはや遠慮などせぬ。

離恨（離れの恨み）

酔っぱらった筆で酔っぱらいの言葉をしたため、酔いに乗じて我が狂なる部分を見せよう。

瞻彼北山 彼の北山を瞻

發我南音 我が南音を發す。

清商入徵 清商徵に入り

凄惋動人 凄惋人を動かす。

有客問我 客有り我に問う

何為乎然 何為れぞ然るや、と。

人鮮兄弟 人兄弟鮮なく

他郷離散 他郷に離散す。

素秋將央 素秋將に央きんとし

草木且變 草木且に變ぜんとす。

霧露侵体 霧露体を侵し

思夢煩襟 思夢襟を煩す。

匪飢匪渴 飢えず渴せざるも

伏枕輾轉 枕に伏して輾轉す。

何日斂翼 何れの日か翼を斂むること

于彼旧林 彼の旧林においてせん

【訳】我らは、束縛を受けない才人だ。詩文を作り酒を飲み気は猛々しい。

いたずらに酒飲みの倨傲だけを長じ、人をあきれさせる。

\*やや自暴自棄な詩である。京都でのストレスを一気に

【注】○南音…南の音楽。○清商入徵…商徵ともに古代中国の音階。○匪飢匪渴…『詩経』「小雅」「甫田之什」

「車<sup>しゃ</sup>獺<sup>か</sup>」に見える。

【訳】あの北山を見て、我が南の音楽を奏でる。調べは短調へと変わり、その凄まじさは人を動かす。ある人が私に尋ねた。「どうしてこのようなのですか」と。「私は答える」「それだけでなくも兄弟が少ないのに、他郷に離散しているのです」と。秋はまさに尽きようとし、草木はまさに色褪せようとしている。露が体を侵し、悩ましき夢が心を痛める。飢えも渴しもしていないが、枕に伏せて寝返りを繰り返す。いつになったら、あの故郷の林で翼を休めることができるのだろうか。